美少女ヒーロー☆めもり

zen

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美少女ヒーロー☆めもり

【Ｎコード】

Ｎ２４８４Ｔ

【作者名】

ｚｅｎ

【あらすじ】

主人公、赤井正太郎（２４歳・男）が美少女ヒーロー☆めもり（１７歳・女）に変身して悪と戦う、心温まるお話だと多分思います。ｐｉｘｉｖでもやってます。

度胸変身☆めもり

昼間の公園に響き渡る悲鳴。それはヒーローを求める声。

「誰かー！助けてー！」

「うっひっひ。みんなサッカーボールみたいにしちゃうぞー！」

悪の親玉、ダークケイトによって人の悪い思い出から生み出された怪物、トラウマーである。

おのれトラウマー、そうはさせるか。

「そうはさせんぞ！トラウまああ！？」

突然の蹴りにはいかにヒーローであろうとも避けられない、そして痛い。

「ちょっと」

「何すんだよ！」

「先輩、真面目にやってます？」

冷たい目で見下ろす、俺に蹴りを喰らわせたこの女の子は森めもり（１７歳）。

俺の後輩でマネージャーをやっている。

そして俺より多分強い。

「当たり前だろ！どこを見て不真面目ととれるんだ！？」

「見た目からして不真面目でしょう。何で変身しないんですか」

「う……いや、その、この程度の相手なら変身しなくても、なんて……」

「何馬鹿言ってんですか。死にますよ？」

冷静に死亡予告されてもだな。

「先輩、変身しないとひ弱なんですから。変身してください」
ひ弱て。
「……うむむ……」
「そもそも変身しないと、物語として成り立ちませんが」
「うう……マジでこれオンエアーされるわけ……」
「先輩」
「……だー！わかった！わかったよ！やればいいんだろやれば！」
“真面目に”やるんですよ？」
「……わかってるよ」
後輩マネージャーの冷たい視線を浴びながら、俺はしぶしぶ変身ベルト（めもり作）に手を当てる。
「……はあ」
「先輩」
「わかってるって！」
息を大きく吸い込み、
「変☆身」
俺は叫んだ。
ベルトから無数の星が散りばめられそれらは右手を被い、左手を被い、身体を、両足を被い、そして最後に頭を被う。
「うっひっひ。さあいつのワールドカップのモデルがいい？」

「ひー！！」

「そこまでよ！トラウマー！」

「誰だ！？」

トラウマーの前には、赤を基調とした、可愛いワンピースに手袋、ブーツを履き、星の髪飾りを付けた、赤毛のツインテールで、大きな瞳、長いまつ毛といういかにもな美少女ヒーロー（見た目は１７歳）が現れた。

ちなみにワンピースは胸（貧乳）を強調する作りになっている。

「煌めくは情熱の星！美少女ヒーロー☆めもり！！」

俺の名前は赤井正太郎、２４歳、性別はもちろん男。

職業は「美少女ヒーロー☆めもり」である。

スターメモレアル☆たくと

「くらえ！トラウマー！」
「キャーッチ！！」

俺の名前は赤井正太郎、２４歳。ヒーローをやっている。
今日も今日とて「美少女ヒーロー☆めもり」に変身して戦っている。
ちなみに今日の対戦相手は「過去に甲子園出場をかけた試合で平凡なセンターフライを捕れずにサヨナラ負けを喫した」という思い出を持つ青年から生まれたトラウマーである。

「んな簡単にキャッチされてたまるかあああー！！」
「キャーッチ！！」
「くそ！せっかく一撃入れたのに字面的にまるで攻撃を受け止められたことになってやがる……！」
初期に出てくる1話完結の雑魚キャラみたいな奴なのに！

「先輩」
「ぎゃあああ！！」
ちなみに今はどこからともなく現れた7歳年下の女後輩マネージャー、森めもり（１７歳）に腕を後ろへクイッと曲げられて――
「って無理無理無理！ギブギブギブギブ！！」
「何やってるんですか」
「おもいっきりこっちの台詞じゃねーか！」
「容姿と口調がまるで合っていませんが」

「……いや、独り言くらいいいだろ」

それはまさしくお前のことだろう、とは口が裂けても言えない。腕が裂けるからな。

「よくないです」

そう言って森は俺の腕を後ろへクイッと曲げてあと数センチで後頭部と密着――

「って無理です無理です無理です！」

「無理です？」

「いやできます！できますできます！だから腕は元の位置に！」

「では早く倒して下さい、こんな雑魚キャラのテンプレにどれだけ時間かけてるんですか」

時間がかかっているのはお前のせいだ、とは口が裂けても言えない。腕が裂けるからな。

「いやそうは言ってもだな、めもりの必殺技ってそもそもあるのか？」

「あります」

「あるの！？」

「ヒーローですから。あるに決まっているでしょう」

「ぐっ……久しぶりにまともなことをさも当然のように言いやがる……！」

「何か？」

「いえ、特にありません。続きを」

「変身ベルトの中央にある星を右に回して下さい」

「こうか？」

森の言った通り星を回してみると、なるほど、９０度横に回転した。

というかそんな機能あったんだ。

「おお……！？」

すると星が光り始めた。

「一体……どんな武器が……！！」

「……」

「……」

しかし一向に武器は現れない。

「……何も起きないけど」

「掛け声が必要です」

「そこまで律儀なの！？」

「右手を空にかざし、『集まれ星の光！スターメモリアルタクト！』と叫んでください」

ええー！？

何！？そこまでやらなきゃいけないの！？

「そうしなければ必殺技を放つための武器は現れません」

確かにヒーローが武器を出す時は決まって叫ぶ。が、しかし……。

「ぐぬぬ……」

しかし……！２４歳にしてそれを叫ぶなんてそんな黒歴史確定なことを……！

「先輩」

くっ……だが必殺技なしでこの先手強い敵が現れたとて太刀打ちできるかどうかわからない……。

何より、このままでは俺は（森に）やられる……。

「先輩？」

「……ええーい！やったらあああああああああ！！」

「あ、集まれ星の光！スターメモレアルタクトおおおおおお！！！！」

叫び終わると同時に変身ベルトの星が強い光を放ち、天を貫く。

「こ、これは……」

そして俺の右手には、ロケットランチャーが現れた。

そう、これがスターメモレアルタクト。
通称、ＳＭＡＷロケットランチャー。肩撃ち式、多目的ロケットランチャーである。

盛大に台詞を噛むことで現れたこの非常に現実的な武器によってトラウマーは一撃で倒れ（というか吹き飛び）、俺は森に一撃で倒された（というか殺されかけた）のであった。

ダークケイトの帰還・前編

――ダークウール城――

「ええい！美少女戦士☆めもりはまだ倒せないのか！」
「ももも申し訳ございません。あとアサオ様……」
「アサオじゃなくてアサコと呼べと何度言ったらわかるの！このポンコツトラウマー！」
「ももも申し訳ありませんアサコ様……」
「で、何？」
「おおお恐れながら、美少女戦士ではなく、美少女ヒーローでは……」
「……」
「それでは月に代わって――」
「うるさいわね！どっちだって大して変わらないでしょうが！！」
「ぷぎゃっ」

人形の形をしたトラウマーを鬼の形相で殴りつけた、麻の生地のスカートをはいたその女性、アサオもといアサコは酷く焦っていた。

「……早く……一刻も早く、あの美少女戦士を倒さねば……！」
「びびび美少女ヒーロー……」
「うっさい！」
「ぷぎゃっ」

「ぶえっくしょい！」

今日もどこかの誰かが俺の噂をしているらしい。
まったく、ヒーローってのも辛いもんだ。

「……」
「あ、すまん。唾飛ん……だ……？」
見下ろせば、そこには悪の親玉よりも冷たい目をした森がいた。
「先輩」
「は、はい……？」
いかん、いかんぞ。
これは何か俺がやらかした時の目だ。
考えろ考えるんだなどという思考の間は一切あるはずもない。
「もし次にその姿で親父臭いくしゃみをした場合は酷く痛い目に遭うと覚えておいてください」
「腕！腕が後ろにクイッとなってるのは酷く痛い目じゃあああああ！！」
「ちなみに唾はしっかりと私の周りに飛散したのでこれはその分です」
「飛散！？付着じゃなくて飛散でこれなの！？」
「付着した場合は腕が1回転します」
「えええええ！？」
「あ、親父臭いくしゃみをして、唾が私に付着した場合は3回転半します」
「トリプルアクセルじゃねーかあああああ！！！！」

「ふうん。次々とトラウマーを倒してるというからどんな奴かと思えば、大層間抜けそうなツラじゃないか」
「本当にわかってます？」
「わかってます！痛い！痛いのがわかります！」

「だがこのアサコが来たからには……」
「わかってないようですね」
「痛い！わかる！痛い！俺！痛い！わかる！」
「来たからには……」
「わかる！痛い程に伝わる！」

「おい！！」
「ん」
「お！」
軋む腕がようやく解放された。一体どこの誰かは知らないが、
「ありがとうございます」

「何で宿敵にお礼を言われなきゃならないんだ！私の話を聞け！」
「宿敵！？」
じゃあ、まさかこいつが……
「ああ、そうさ！私の名は――」
「もしかしてこいつがダークケイトか！」
「へ？」
「こんな物語の序盤で出てくるとはなんて卑怯な……！」
レベル２０くらいの勇者の前に魔王が現れた感じじゃねえか。パワーバランス崩壊ってレベルじゃねーぞ！
「いやいや何言ってんだい、私は――」
「くそ！」

最早恥ずかしい台詞を叫ぶことに戸惑ってる場合じゃねえ。

「やってやらあ！！」

俺は変身ベルトの星を右に回し、力一杯叫んだ。
悪の親玉を前に黒歴史の確定だとか、羞恥心なんてこれっぽちもなかった。

「集まれ星の光！スターメモレアルタクト！」

俺の右手にはスターメモレアルタクト、通称ＳＭＡＷロケットランチャーが現れた。
そう、油断していたのだ。ついさっきは噛まずに言えたから。

「な、なんだいその大仰な武器は！？」
「……」

目の前で驚くダークケイトと後ろで冷ややかな目線を送る森を尻目に、この時の俺は至って冷静だった。
「……いや、こいつだって武器としての威力は申し分ないはずだ」
威力だけならスターメモリアルタクトをも凌ぐ。
ただ美少女ヒーローが扱う武器としては非常に現実的すぎる、という一点を除けば何の不服もない。

「これで！終わりだ！！」
スターメモレアルが火を吹く。
「ちょっと……待ってええええええ！！！！」
弾は一直線にダークケイトに向かい――

「や、やった、のか……？」

目の前は煙に覆われている。
弾はダークケイトに命中した、はずだ。
この至近距離では外しようがない。

「そうさ、当たらないわけがない」
当たった。当たったんだ。

「直撃で、やられないはずがない……！」
徐々に煙が晴れていく。
奴の姿は見えない。

勝った！勝ったんだ！

「やったぞ！森……」
森の方を振り向こうとしたその瞬間、
「こんの……クソガキ……」
煙の中の“何か”が動いた。
「やってくれたわね……！」
いや、何か、ではない。
それは紛れもなく“誰かの影”で。
「……嘘……だろ……？」
その影は紛れもなく、
「流石の私もブチ切れたわ……！！」
ダークケイトのものだった。

――油断して噛んだわけではなかった。

――至って冷静でなんていられなくて、

――俺はただ、焦っていたのだ。

「おや？あそこで戦っているのはもしかして――」

（つづく）

ダークケイトの帰還・後編

「……ッ」

直撃は、した、はず。
この距離で当たらないはずがない。
けど、
当たったのに……
当たったのに、倒れないはずがない……！

「直撃はしました」
「……けど！」
「服が傷付いています」
「……！」
けど！直撃したのに――
「何より、この距離では外しようがない。そうでしょう？」
「……！！」
必死に縋ろうとする俺に、森は残酷な言葉を投げかける。
この期に及んでまるで俺が敵であるかのような態度を取りやがって。

……けど！
「俺は！自分の目で確かめるまで信じねーよ！！」

俺は自分の不安を掻き消すように、打ち消すように、もう一度スターメモレアルタクトを撃ち放った。
そうさ、いつだって森は、俺に冷たい言葉を投げかけてきた。
今回だってそうなんだ。

効かないわけ、ないだろ？

「効かねえっつってんだろうがクソガキ！！」

そして俺は、念願叶って見てしまったのだ。
奴が、両手で弾頭を捕らえ、
そのままそれを上へと受け流す様を。

「……ったく、ほんっとに話を聞かねえクソガキだこと」

上空で、放った弾が爆発する。
俺の撃ち放った希望は、見事打ち砕かれ、爆発してしまった。

「……嘘、だろ……？」

ヒーローが絶望する様を、待ってくれる敵なんていない。
これは特撮でもばければ、アニメでもないんだ。

次の瞬間、俺はダークケイトにタコ殴りにされていた。

「オラオラオラオラオラ！どうしたクソガキ！」
スタンド使いでもないのにその掛け声はどうよ。
「人の話を聞かないクソガキにはおしおきだよ！」
一発一発が、重い。
やっぱり強いわ、ダークケイト。
レベル２０の俺にどう魔王を倒せってんだ。
無理ゲーだろ。
「……ってん……か……」
まあ痛めつけ方がストレートな分、森よりはマシってもんか。
「……に……ってる……すか」
あれ？けど森ならこいつ倒せるんじゃ？
「……なに……ってるん……すか、……ぱい」
森、なら……

「なにやってるんですか、先輩」

「森！？」
「……！？」
背後から感じる、恐ろしく冷たい殺気によって沈みかけた意識が一気に覚醒した。
と同時にダークケイトも異変を感じたのだろう、攻撃を止めた。
「も、森……？」
恐る恐る振り向くと森が「こっちへ来い」と手招きしている。
「何だ……あいつは……」
警戒してかダークケイトもじりじりと距離を取っている。
今の内に。

「森……」
先ほど感じた殺気は感じられない。いつもの森だ。
ほっと安堵しつつ森にかけよると俺はいつものように右手を掴まれ、後ろにクイッと回され、親指と後頭部が密着――
「痛い痛い痛い！指！指が後頭部とキスしてる！！」
「なにやってるんですか先輩」
「だ、だって――」
「たかが一発の直撃で倒せなかったくらいで何をへこんでるんですか」
「痛い痛い痛い！だ、だって！スターメモレアルタクトが効かなかったんだぞ！」
「だから何ですか」
「いや、あの一撃で――」
ん？たかが“一発の直撃で倒せなかった”くらいで……？
「一発で倒せないのなら百発当てればいい」
「え……」
「傷付いているのは奴の服だけではありません。顔にも腕にも、身体にも傷は付いています」
そう、なのか？
「二発目の弾を受け流したのは余裕からじゃない。一発と言えど、当たればしっかり効くんです」
そうなのか……！
「スターメモレアルタクトは一発の威力が高い分、次の装填に時間がかかる、という欠点があります」
「た、確かに」
装填してる間にやられちまう可能性があるってことか。
「じゃあどうすれば」
「ならば装填しなければいい」

森は俺の右腕を解放し、
「今から私の言う台詞をしっかりと復唱してください」
滅多に見られない笑顔で俺を脅した。
「噛んだら、腕がねじ切れますよ？」

「くっ！何をやっているんだ私は！」
あんな付き添いの女にビビってる場合じゃない。
急いであのクソガキを始末しなければ、ケイト様が……！

「トラウマー化……！」
体中の筋肉が活性化を始める。
豊満な胸は縮み、男らしい分厚い胸板となる。
「っはあ……」
口からは野太い声が発せられる。
「さあクソガキ！おしおきの再開――」

「集まれ星々の光！スターズメモレアルタクト！！」

野太い叫び声が強い光によって掻き消される。
「なんだ！？」
次々と何かが地面に突き刺さる音。
「一体何が起きている！？」
しばらくして光が消え――
「な……」
今、俺の周りの地面には約２００基のスターメモレアルタクト、通称ＳＭＡＷロケットランチャーが突き刺さっている。
「今からこれら全てをお前を狙って撃ち続ける」
１基を地面から抜き取り、ダークケイトに向かって構える。
「覚悟しなさい！」

一発撃っては投げ捨て、次のメモレアルタクトを地面から引き抜き、撃つ。
また一発、また一発と撃つ。
砂埃が舞う。
煙が舞う。
しかし奴を見失うことはない。
これも変身時の特殊能力なのだろうか。
俺の大きな瞳は、奴をしっかりと捕らえ続けている。
大きな爆撃音。火薬の臭い。砂の味。
重たく冷たいメモレアルタクトの肌触り。ダークケイトの姿。
五感の全てが、今この闘いを感じていた。
一発、また一発。
尽きることなく俺は撃ち続けた。

「『スターズメモレアルタクト』は『スターメモレアルタクト』を約２００基出現させる掛け声です」
「２００！？」
何ともえげつない。
「『スターズ』の力は『メモレアルタクト』と『メモラアルタクト』に限って適用可能です」
ん？待て待て。今聞いたことのない単語が出てきたぞ。
「つまりは、今回のような数で勝負をかける時には２種類の武器から選択できる、というわけです」
「ちょっと待て。ロケットランチャー以外にまだ何かあるの？」
「それはおいおい」
「引っ張るの！？」
「とにかく、早いとこやっちゃってください。あんな相手にいつまでも苦戦してるわけにはいきません」
「あんなって、あいつラスボスだろ？」
「……まあ、その話は終わってからにしましょう」

「……疲れたー……」

闘いを終え、俺は今、仰向けに寝転がっている。

さすがに約２００基ものロケットランチャーを構え、撃つのは骨が折れる。
集中力をフルに使い切ってしまった。
できればこんなことは今回限りにしていただきたい。

「……というか、勝ったんだよな……ラスボスに」
目の前には黒焦げになったダークケイトが倒れている。
ちなみにダークケイトは１００発目を越えたあたりから微動だにしなくなった。
だが念には念を。
全て直撃とまではいかなかったものの、約１５０発くらいは直撃させたと思う。
我ながら鬼畜な美少女ヒーローっぷりである。
「先輩、おつかれさまです」
森が歩いてくる。
せっかくラスボスを倒したってのに、労いの言葉が後輩マネージャーからだけとは何とも寂しいものだ。
子供達の声援と歓声くらい欲しかったものだが、そもそも今回は誰かが助けを求めていたわけじゃない。
ギャラリーもいないだだっ広い空き地での戦闘だったんだっけ。
「まあでも……」
毒舌が通常営業の森から労いの言葉をかけられるなんて、一級品のレアアイテムだ。ありがたく頂戴しておこう。
「とりあえず、これにて一件落着か」
ぱーっとお祝いでもしたいね。
今日は奮発して生ビールでも買っちまおうか。
「先輩、それについてですが――」
「んあ？」
そういえばさっき終わった後に話すことがあるって言ってたっけ。
森の方へ身体を起こそうとしたその時、

「これまた派手にやられたねえー」
「……あ？」
振り返れば、黒焦げになったダークケイトの側にはいつのまにか小柄な少女が立っていた。

「……け……さま……」
「ああ、いいよ、そのままそのまま」
「……も…しわけ……あり……」
「全然いいよー。僕、気にしてないから」
その少女はにっこりと微笑み、

「じゃあね、“アサオ”」
そして、ダークケイトを粉々に消し飛ばした。

「……」
「……先輩、今すぐに立ち上がらないと腕を“ねじ切られますよ”」
森が珍しく、本当に珍しく、緊張した声を俺にかける。

「君がめもりちゃん？」
少女はこちらに顔を向け、
「初めまして」

とびっきりの笑顔で恐ろしい言葉を紡ぐ。

「僕が、ダークケイトだよ」

――俺はこの時初めて、自分がどれだけ焦っていたのかを理解した。

――全てが早とちりだったのだ。

mp；4

美少女ヒーロー☆めもりｅｐｉｓｏｄｅ３＆ａ

「ダークケイトの帰還」

「ただいま、めもりちゃん」

逃避

ダークケイト改め、アサオとの闘いから1週間が経過した。

俺が最後の最後までダークケイトだと思い込み、持てる全ての力を出し切って掴んだ勝利は、あの少女――本物のダークケイトの出現によって霞んでしまった。

当然、闘いは終わるはずもなく、今日も俺はトラウマーと一戦を交えているわけだ。

ではここで、そろそろ皆も気になっている頃であろう、美少女ヒーロー☆めもりの秘密についてご説明したいと思う。

「どすこーい！」
「おやめなさい！トラウマー！」
「どす！？」

ご覧頂けたであろうか。
そう、人の悪い思い出から生まれた怪物が俺に見とれているのである。

？　敵をも魅了する可愛い容姿

設定上、めもりは17歳ということになっているが、年齢の割に幼

く見える童顔、もちもちの肌、聞く人をくすぐるような声、ツインテール、そして何より貧乳。
そのポイントは高いと言わざるを得ない。

「どすこーい！！」
「きゃあああ！！」
「どす！？」

ご覧頂けたであろうか。
そう、人の悪い思い出から生まれた怪物が俺に見とれているのである。

？　破れやすいコスチューム

言わずもがなである。
これ以上語る方が野暮と言わざるを得ない。

「先輩」
「きゃあああ！！？」
「現実逃避してる場合ですか」

ご覧頂けたであろうか。
そう、人に非ざる怪物、怪物から生まれた人、怪物の皮を被った人、

ご存知極悪非道な後輩マネージャー、森である。
「痛い痛い痛い痛い！！」
言わずもがなである。
痛い以外の言葉が見つからない。

「何やってるんですか」
「何って、美少女ヒーロー☆めもりの秘密がそろそろ知りたいという読者のためにだな」
「知りたい人なんて3で割り切れる数字より少ない思いますが」
「それって一人しかいないってこと！？むしろそれ誰！？」

「……と、まあおふざけはここまでにして」
おふざけかよ。必死に突っ込んだ俺は何だったんだ。
「そろそろ真面目にやってもらわないと困ります」
「トラウマ―は倒してるんだからいいじゃねーか」
「そういう問題じゃありません」
真面目にって言ったって。
そりゃ確かにさっきは少しふざけてたけど……
「闘いの時は真面目にやってるつもりだ」
「いいえ、真面目にやっていません」
なんだっつーんだよ。
「あのなあ、俺だってこれでも真面目に……」

「先輩、このままではいつか死にますよ」

「なっ……！？」
森は、ごく真面目に、落ち着き払った口調でそう告げた。
「この間、ダークケイトを目の前にして、どうでしたか？」
あの時の光景がフラッシュバックする。
「ど、どうって……」
アサオを消し飛ばす小柄な少女。
あの屈託のない笑顔。
「先輩も“一応”ヒーローですから、そこまでは鈍くないと思いますが」
一応、という単語が強調された気がした。
「勝てない、と思ったんじゃないですか？」
「……ッ！……それは」
嫌な汗が額から流れ落ちる。
「あれ以来、どこか諦めて闘っているんじゃないですか？」
「……違う」
森の真っ直ぐな、冷たい目を直視できない。
「トラウマーをこのまま倒し続けたって、世界を守ることはできない」
「……違う」
「なんとなくトラウマーと闘って」
違う。
「なんとなく勝って」
違う。
「今まで与えられたものになんとなく従って」

……ヒーローだから。それだけの理由で美少女って設定になんとなく従って。

「自分が死なないために闘って」

死にたくなくて、あれだけ必死に闘って。
死から逃れるように、何も見ないで、ただ闘って。
焦って闘って。

「先輩は自分に与えられたものの重みを知ったはずです。けれど、まだその重みに気付いていないフリをしている」

ああ、そうさ。

「今までと同じように振る舞うことで、問題を先送りにして。ただ与えられたものに縋って、ヒーローという名に縋っているだけです」
「……ッ！！違う！！」
「先輩は――」

「違うっつってんだろうが！！」

気が付けば俺は森の頬を殴っていた。
その頬は赤みを帯びていく。

「……ッ」
「……」

森は少し驚いたように目を見張り、しかしすぐに落ち着きを取り戻したように俺を真っ直ぐ見つめ直した。
「……！！……くそっ」
その視線に耐えられず、俺は逃げるようにその場を後にした。

「……なんで何もやり返さないんだよ……！」
いつもなら腕を引き裂くくらいのことするはずだろ……！

「……あの容姿であんな必死に走っちゃって」
「……パンツ、見えちゃいますよ」

一瞬だけ見た森の目は、先ほどの冷たいものではなく、
とても、悲し気なものであった。

水玉模様の傘

今、俺の目の前にはぴくりとも動かなくった黒焦げのトラウマーが横たわっている。

「……」

「……ぐすっ……」

俺の後ろには泣きじゃくる小さな女の子がいる。

「はあ……はあ……」

俺は息を荒げている。

「スターズメモレアルタクト」を使用したからだ。

ＳＭＡＷロケットランチャーがそこら中に投げ出されている。

「はあ……はあ……」

使わざるを得なかったわけではない。

ただ一方的に、“ただのトラウマー”に、俺が約１００発のメモレアルタクトを浴びせた。ただそれだけ。

１００発目を越えたあたりで女の子が泣きながら俺を止めた。

ただそれだけのことだ。

「ヒーローのくせに、随分と惨いことをするのだな」

――雨が降っていた。

美少女ヒーロー☆めもり　ｅｐｉｓｏｄｅ６

「水玉模様の傘」

腰に刀を差した、黒い着物の女性が立っている。

「……誰だ？あんた」

今は疲れているんだ。放っておいて欲しい。
「私は、ウール三姉妹が次女。キヌコ」
「ウール三姉妹？」
誰だそれ。聞いたこともない。
「悪いが俺はあんたに用事はないんだ」
さっさと帰って寝よう。今日はもう疲れた。
“ノルマ”だって終わっているんだ。
「お前にあらずともこちらにはある」
「……疲れてるって言ったろ？また明日にしてくれ」
いい加減女の子にも泣き止んで帰ってもらわないとな。
……正直面倒だ。
振り返り、一歩踏み出した瞬間――
「……え……？」
背中に鋭い痛みを感じた。
「……背を向けた相手を斬る、というのは気が進まないが」
血が滴り落ちる。
「きゃあああああああ！！」
女の子が悲鳴を上げる。
「なん……だってんだ」
俺はそこでようやくしっかりと女性を見た。
「先日、貴様が倒したアサコは私の姉だ」
「アサコ……？」
まさか、あのアサオのことか……？
横たわるアサオ、そして、その傍らにたたずむ“あの少女”を思い出す。
「姉に代わって貴様を殺す」
女性改め、キヌコの構えるその刀の刃は、俺の血に赤く染まっていた。

雨に打たれた身体が容赦なく冷えていく。
意識がはっきりしない。
雨音がやけに大きく聞こえる。
体中から水が滴り落ちる。
薄い赤色の水が滴り落ちる。

「はあ……はあ……」

大分斬られたな。
刀使いの敵なんて初めてなものだから、避け方がわからない。
これだけ斬られて、致命傷がないのが救いだろう。
いや、あえて致命傷を避けているのだろうか。
俺を嬲るために。

「……つまらんな」
再びキヌコに斬られる。
わかっていても避けられない。速すぎるのだ。
例え避け方がわかったとしても、きっと身体がついていかない。

「くそ……！」
咄嗟に近くに落ちているメモレアルタクトを手に取る。
「おおおおおお！！」
「遅い」
またしても斬られる。今度は腕だ。
「――ッ！」
堪らずメモレアルタクトを落とす。

「そのような鈍重な武器で私の速さに敵うとでも思っているのか」
「けど、あんたの攻撃は速い分、軽いじゃないか」
そんな攻撃じゃ俺を倒すのに日が暮れちまうぜ。
何の意味もないただの負け惜しみの言葉を口にしてみる。
こんなこと言った所で何か変わるわけでもないのに。
そんな愚痴を零そうと思った次の瞬間、

「ではこれならどうだ？」
「！？」

キヌコが“男”になった。
その声は低く、首や腕の太さが倍に膨らんでいる。
背丈も伸び、全体的に巨大化したように感じる。
ヒーロー物では定番中の定番、敵の巨大化が始まるのかと思ったくらいだ。
だがそんな悠長にのんきなことを考えている場合でもなければ暇もない。

「やばい！！」
先ほど落としたメモレアルタクトを拾い、盾にしようと構え、
「吹き飛べ！！！！！」
言われた通り俺はその盾ごと、吹き飛ばされた。
いや、斬り飛ばされた、叩き飛ばされた、と言った方がいいだろうか。
とにかく誇張ではない。
俺は刀によって吹き飛ばされたのだ。

「……いってえ……」
ガードしたはずなのに……。
左肩が深く斬られ、いや割られている。
盾にしたはずのメモレアルタクトは真っ二つに割れている。
「……はは、鉄製だよな……これ……」
冗談じゃねえ。どこの世界に鉄を真っ二つに割る剣士がいるってんだ。
「……俺、死ぬのかな」
空から絶え間なく雨が落ちてくる。
左肩がやけに熱い。心臓が動くたびに激痛が走る。
雨に血が混ざって流れていく。

「……めもりちゃん……」

「……君は……」
まだ逃げてなかったのか。早く逃げないと殺されちまうぞ。
「……めもりちゃん」
雨と涙と鼻水で顔がぐしゃぐしゃになっている。
「……」

……俺がこのまま死んだら、この子も死んでしまうのだろうか。
だったらせめて、この子だけでも逃がしてやった方がいいのだろうか。
俺があいつを食い止めている間に、逃がしてやった方がいいのだろうか。

それが、ヒーローのやることなのだろうか。

こんな時……

「こんな時……森がいたら……」

何て言うのだろうか。

――その時突然、雨が止んだ。
「なにやってるんです、先輩」

――空が、水玉模様へと変わった。

雨が止んだら

雨が傘に落ちる音が水玉模様の空から聞こえる。

「この傘、リバーシブルなんですよ」
裏面にも水玉模様が描かれてるんです、可愛いでしょ？
森が、少し誇らしげに言う。
森でも可愛いとか言うんだ。
「……つーかそれ、リバーシブルって言うのか……？」
「子供の頃、よく遊びませんでしたか？傘を裏返してアンテナーって」
「やらねえよ」
どっちにしろそれがリバーシブルと言う理由には繋がらんだろ。
「私、よくやるよー！」
いつの間にか女の子も森と色違いの水玉模様の傘を差している。
森は赤色と黄色の、女の子は青色と緑色の配色だ。
「……予備でもう1本持ち合わせていたので」
恥ずかし気に目線を逸らす森。
何のための予備だよ。そして何故恥ずかしそうにする。
「……それはそうとして」
キヌコの方を見やる森。
「どうするんです、先輩」
「……そう、だな」
なんとか上半身を起こし、俺もキヌコを見る。
「キヌコはウール三姉妹の中で一番強いでしょう」
「……そうなのか」

「……先輩が闘いたくない、というのならば、私は止めません」
森の声のトーンが落ちる。
「いつもみたく、腕をねじるなりなんなりして脅さないのか」
「ねじってそのまま取れたら困ります」
ああ、そういえば左肩がパックリやられてたんだっけ。
「それに、こればかりは先輩に決めていただかなければ」
「そうか」
相変わらず“真面目”な奴だ。
ちらりと女の子を見る。
俺と森の間に流れる張りつめた空気を子供ながらに読み取ったのだろう。話の内容はさっぱりなはずなのに、緊張した面持ちで俺達を見ている。

「あのさ」
「はい」
「勝てるのかな。……あいつにも……ケイトにも」
「大丈夫です、私がいますから」
俺の問いに森は迷うことなく答えた。
「そうか」

その言葉を聞いて、俺はとても、身体が軽くなった気がした。

「俺さ、『めもり』になる意味っての？実はまだよくわかってないんだわ」
「……先輩はあまり頭も良くないですからね」
「けど、その重みってのはここ最近で痛いくらいにわかった」
アサオとの闘い、ケイト、そして黒焦げになったトラウマーを思い出す。
「その重みを一人で背負うことがしんどくて、それで、色々と酷いことをやっちまった」

「はい」
「トラウマーを引くくらいにボコボコにして、それを女の子に泣きながら止められて。あと、そのなんだ。……とある女も殴っちまって、喧嘩別れ、みたいなことして。……一方的にだけど」
「……ヒーローとは思えない行動の数々ですね」
「……だな」
まったくその通りだ。返す言葉もない。

「――けど、その女がまた来てくれて、わかったんだ」
森の方を見る。
「そいつと一緒なら、そいつが一緒に重みを背負ってくれるなら、俺に協力してくれるなら、きっと大丈夫だって」
今度はしっかりと正面から森の目を見て、俺は言う。

「俺は『美少女ヒーロー☆めもり』として、この女の子を無事に帰すために、キヌコと闘う。そんでキヌコに勝つ。ケイトにも勝つ」

その言葉に、森は、少し驚いたように目を見張り、しかしすぐに落ち着きを取り戻したように俺を真っ直ぐ見つめ直した。
「協力、してくれるか」
「当然です」
森の目は、あの時のような悲し気なものではなく、温かな、希望に満ちたものだった。

「あれ？」
女の子が空を見上げる。

「今から私の言う台詞をしっかりと復唱してください」

傘を閉じる森。

「噛んだら、腕がねじ切れますよ？」

雨は止み、空から光が差し込んでいた。

美少女ヒーロー☆めもり　ｅｐｉｓｏｄｅ７

「雨が止んだら」

左肩を押さえながら、キヌコの元へと歩く。
その足取りは軽い、と言いたい所だが、やはり体力がかなり消耗しているらしい。時折ふらつく。傷もいまだにズクズクと痛む。

「話は終わったか」
“巨大化”もとといトラウマー化（さっき森に聞いた）キヌコが佇んでいる。
「お前達、トラウマー化して男になるんだってな」
「……そんなくだらない情報を得るための長話だったか」
「だからアサオのこと“アサコ”なんて呼んでたのか。『ウール三姉妹』じゃなくて『ウール三兄弟』って呼んでやろうか？」
「……貴様」
目に見えてキヌコは怒っているようだ。
ここで止めの一言。

「ほら、かかってこいよ。“キヌオ”」
「望み通り殺してやるッ！！」

切れたキヌコもといキヌオが突っ込んでくる。
“トラウマー化”して、筋肉がついた分、スピードは落ちている。
ウール三姉妹は肉体強化としてトラウマー化ができ、変化後は男になる。
それはつまり何らかの『男に関するトラウマ』を抱えているということ。
そしてその『男に関するトラウマ』の中で、もっとも三姉妹の逆鱗に触れるトラウマ。
それは自分達を男の名前で呼ばれること。
それを利用して相手を挑発させる。

全て森の作戦通り。
ここからが本番だ。

「集まれ星々の光！スターズメモラアルタクト！！」

怯むことなく力一杯叫ぶ。
左肩の傷にこれでもかというくらい響くが、そんなことは気にしていられない。

そこら中に落ちているメモレアルタクトは消え、強烈な光と共に約２００もの剣が現れる。
「剣だと！？小癪なッ！」

そう、『スターズ』が適用可能なもう１つのタクト、『メモラアルタクト』は剣なのである。

地面に突き刺さった１本を右手で抜き取り、キヌオに切り掛かる。
が――
「素人に私の刀が負けるか！」
「……ッぐぅ……」
剣は折れ、再び吹き飛ばされてしまう。
けれど、これで良いのだ。
すぐに立ち上がる。
「……まだまだいくわよ！！」
また１本を抜き取り切り掛かる。
左手が使えない分、力を上手くこめられない。
……いや、左手が使えたとしてもこの力には敵わないだろう。

１本、抜き取っては切り掛かり、折られ、また１本、また１本と折られていく。
その度に傷は増え、左肩は余計に痛む。
「まだまだ！！」
それでも攻撃の手を緩めるわけにはいかない。
「ふんッ！」
血が舞う。
「まだまだ！」
３０本目を越えたあたりからどうにか吹き飛ばされなくなってきたものの、それでも剣は折れ、血は舞い、俺の体力はどんどん失われていく。
「この短時間で驚異的な成長だが！それでも私には勝てん！」
それでも、俺は動き続けなければならない。

「はあ……はあ……」
それにしてもきつい。
剣も５０本目を越えたあたりだろう。
そろそろだな。
「ッ！キャッ！？」
雨でぬかるんだ地面に足をとられた“ふり”をする。
「終わりだ！！」

――そう、俺は動き続けなければならなかった。なぜなら――

「！？」
何かが風を切り、キヌオの頬をかすめ、切り傷が刻まれる。
正確な狙い。キヌオが避けていなければ眼球に一直線だったであろうその一撃は、紛れもない、森の一撃。
「あの女……！剣を投げて……！？」
全てはこの一瞬の隙を狙うため。
約２００ものスターズメモレアルタクトを出現させ、がむしゃらに攻撃の手を緩めなかったのも、足をとられた“ふり”をしたのも、俺一人に意識を集中させるため。俺が勝負をかけていると思い込ませるため。
森に剣を渡し、不意打ちの一撃をぎりぎりまで気付かせないため。
全ては、この一瞬の隙を狙って最大の攻撃をぶちこむため。
「必殺――」
右手に４本、そして“左手”に３本、メモラアルタクトを無理矢理に持つ。
「！！」
「セブンスター☆乱れ突き！！」
計７本のメモラアルタクトを一斉にキヌオへ突き刺した。

7本のメモラアルタクトが突き刺さったキヌオはゆっくりと膝を付き、
「……左手といい……技名といい……本当に何から何まで、ヒーローとは思えない……な」
そう言い残して、倒れた。
「……技名は余計だ、くそったれ」
『ウール“三兄弟”』最強の剣士、キヌオはそのまま、跡形もなく消え去った。
アサオ戦以来の、いやそれ以上にギリギリだった今回の闘いにようやく、幕が降りた。

「めもりちゃーん！」
「おぶっ！」
女の子が突進と表現するのにふさわしい程の勢いで抱きついてくる。
これでも満身創痍なのだから少しは気を使って欲しいものだ。
苦笑いで女の子の頭を撫でる。

そうして、女の子は俺を見上げ、

「めもりちゃん！守ってくれてありがとう！」

日の光に照らされてより一層、きらきらと輝いた笑顔で精一杯のお礼の言葉をプレゼントしてくれた。

疲れも痛みも吹っ飛んじまうね。

こんな笑顔を見れるのなら、ギリギリの闘いってのも悪くないのかもしれん。いや良くはないけど。

「先輩、おつかれさまです」

森が歩いてくる。

きっと後でもう少し俺がキヌオを引きつけておけば致命傷を与えられたのに、だとか、技名がださい（俺はそう思わないが）だとか色々言われて、腕をねじられるのだろう。

けどさ、俺はヒーローなんだ。今くらい格好付けさせてくれたっていいだろ？

「当たり前よ！」

俺は左手を上げ、二人に向かって人差し指を差し、お決まりの台詞を言ってやった。

「世界の平和は私が守るんだから！」

余談だが、俺はこの後、左肩から盛大に出血し、泣きじゃくる女の子と至って冷静な森に見守られ、病院へと運ばれたのであった。

異変

キヌオとの闘いから一夜明け、翌日。
ここは市立運動公園。

「しゅ、出血が……」
「先輩、おつかれさまでした」
「スルー！？出血してるのよ！」
「もう傷は塞がりかけてますよ」
「それがたった今開いたの！」

普通ならば病院で療養のため久々の休日を、などというわけにもいかない。
ヒーローは年中無休なのだ。
と、森に言われた俺は例によってトラウマーと闘い、今しがた倒したところだ。

「……昨日みたく手伝ってくれないのね」
「昨日は私不在故の緊急事態でしたから」
「今も怪我してるんですけど」
「1日でほぼ左肩の傷が完治するくらいの超人的な肉体を持ち合わせている先輩に手伝いなど不要かと思いまして」
「たった今その傷口が開いた所なの！」
「それはさっき聞きました」
しかし我ながら驚異的な治癒能力である。

「元々俺には特殊能力があったのかもしれないね！」
変身前は筋力も運動能力も皆無な俺にもちっとはヒーローっぽい所があったのかもな。なんてなけなしの自画自賛をしなければやっていけない程の毒舌っぷり。
「って痛い！久々に痛い！傷口も痛い！」
久々である。こうやって右腕を後ろにクイッと――
「って何感傷に浸ってるの俺！痛い！」
「まだ一人称が『俺』のままです」
7歳年下の後輩マネージャーは相変わらず手厳しい。

ただ少し、ほんの少しだけ。
森との距離が以前よりも縮まった、ような気もする。
そして――

「めもり！」
「ん、もう大丈夫だよ、少年」
「ありがとな！」
「当たり前でしょ？」

俺の中でも、何かが変わり始めていた。

「世界の平和は私が守るんだから！」

その翌日。

森に呼び出され、いつものようにトラウマー退治へ向かう。
「今日は強い反応が確認されました」
「強い反応ってーと、やっぱ強いトラウマーってことなのか？」
「そう、だとは思うんですが……」
珍しく森の歯切れが悪い。
「森？」
「と、着きました。ここです」

目の前には広い運動公園。そしてその中央で暴れているひときわ巨大なトラウマー。

あれ？ちょっと待てよ。
「ここって……」
「……はい。昨日トラウマーと闘った場所と同じ、市立運動公園です」
おいおいマジかよ。
ここはそんなにトラウマを抱えた奴が大勢集まる場所だってのか。
「いやまあ、人はそれぞれ大なり小なりのトラウマを抱えてはいるんだろうけど」
それにしたって二日間連続で同じ場所で、なんて今まではなかった

ぞ。
どうにも嫌な予感がする。
「これが偶然だってのか？」
「……どうやら偶然でもないようですね」
森がトラウマーを指差す。
「あれを見てください」
森の指差す方、巨大なトラウマーをよく見ると、
「……え……？」

「助けてー！めもりー！」
トラウマーの手に捕まっている子供。
「どういうことだよ……」

それは、昨日助けたはずの少年だった。

「あの子のトラウマーは倒したはずだろ！？」
「とにかく、変身してください」

今まで起き得なかった事態に困惑しているのはどうやら俺だけではないらしい。

「急いで！」

森が声を荒げているのを俺は初めて聞いた。

めもりへと変身した俺はすぐさまトラウマーの元へ走る。
「少年！」
「めもり！」
少年は苦しそうに、しかしすこし安心した様子で俺に気付く。
「大丈夫！？今助けるから！」
とは言ったものの。
「ぶおおおおおおお！！」
間近で見ると余計にデカい。
今までのトラウマ―は大きいものでも２メートルくらいだったのに、こいつは優に１０メートルはある。
「こんなデカいのどうやって倒せってのよ……」
メモラアルタクトで足を切り崩して、ってのが定石なんだろうけど、そもそもメモラアルタクトは何でも斬れて大きさ自在の魔法の剣じゃない。
普通よりも少し切れ味の高いただの剣だ。
「こんなにぶっとい大根足を斬るにはちっとばかり役不足よね……」
ならどうする。１本で足りないなら１００本使えばいい、か？
「ぶおおおおおおおおおお！！」
「めもり助けてー！」
「けど１００本も刺してる暇もない、よね……」

何かの拍子にあの少年が握りつぶされでもしたらそれこそ本末転倒だ。
「めもりー！」
あまり迷ってる暇もないらしい。
「くそ！どうする……？」
「先輩！『メモレアルタクト』を！」
右往左往していた俺に森から指示が出る。
「森！？」
「私が引きつけるのでその間にあの子を！」
「……了解！」
いつも迷っている俺に森は的確な指示を出してくれる。
頼もしい限りだ。俺にとってのヒーローは森なのかもな。

「集まれ星々の光！スターズメモレアルタクト！」

強烈な光と共に約２００もの、ご存知メモレアルタクト――通称ＳＭＡＷロケットランチャーが現れる。
森はその中の１基を手早く拾い、トラウマーの頭部に、いや正確には……
「そうか！目を狙って！」
「先輩！早く！」
「了解！」
森の意図を理解した俺は迷うことなく巨大なトラウマーに向かって走り出す。

「喰らえ！スターキャノン！」

森の掛け声と共にメモレアルタクトは火を吹き、見事トラウマーの右目に直撃する。
「ぶおおおおおおお！？」

相変わらずいい腕だ。俺なんかよりよっぽどタクトの扱いが上手い。
つーか技名あったのかよ！というツッコミを我慢しつつ、
「もう大丈夫よ！」
「めもり！」
その隙に少年を助ける。
「ぶおおおおおお……」
トラウマーの奴、余程痛かったのか右目を押さえてのたうち回ってやがる。
なるほど、武器も使いようってことか。
これならなんとかなりそうな気がする。
「よし、じゃあちょっと離れててね。今から君のトラウマーをやっつけてくるから」
地面に降り立ち、少年を立たせ、のたうち回っているトラウマーを再び見据える。
「う、うん……」
そういや昨日も同じ台詞を言ったっけ。もう少し台詞にバリエーションが――ってちょっと待てよ。
「そういえば……！」
大事なことを忘れていた。
慌てて少年を見る。
「……」
少年は怯えたように目を伏せる。
「何で、君のトラウマーがまた……」
しかも昨日より巨大な姿の、まるで――
「それは……」
少年が弱々しく、何か言おうとした時、
「より、強いトラウマってのはね、心の奥底に眠ってるものなの♪」
「！？」

俺の問いに女性の声が答えた。
「その子のトラウマはまだ、消えてなかったってこと♪」
声の聞こえた方を振り向くと、そこには茶髪でミニスカート姿の可愛らしい女性と、
「森！？」
その側にぐったりと倒れている森の姿があった。

「初めましてめもりちゃん♪ウチが『ウール三姉妹』三女、メンコよ♪」

「『ウール三姉妹』……！」

そしてメンコと名乗るその女性が指を鳴らすと、
「さあ、楽しいショーを見せてね♪」
森の中から、“俺”そっくりの、

“めもり”そっくりの――

いや、“森めもり”そっくりの女の子が現れた。

「逃げてください……先輩……」
その女の子はまるで――

「そいつは私の……『トラウマー』です……」

『美少女ヒーロー☆めもり』そっくりだった。

美少女ヒーロー☆めもり　episode8

「異変」

こんなつもりじゃなかった

目の前で起きている状況にさっぱり付いていけない。
何が起きているのか理解できない。
何故、森が、あの森が、倒れているんだ！？

「三姉妹最強は倒したはずでしょ！？」
なのに何故、森が倒れているんだ！？

「そうよー♪三姉妹最強は確かに、次女のキヌコ♪」
色っぽく唇に指を這わせるメンコ。
「ウチはトラウマー生産能力が三姉妹の中でトップなの♪」
「トラウマーの生産……！？」
「そ♪人の心の奥底に眠る、深くて、ドス黒いトラウマを感知して、それをつよーいトラウマーとして生み出すことができる三姉妹の中で唯一の存在。それがウチ♪」
「……森にトラウマーを生み出させたってのか……？」
「そういうこと♪」
俺に、森に、『美少女ヒーロー☆めもり』にそっくりな女の子がゆらりと動き始める。

「さあ、“初代”めもりちゃんＶＳ“二代目”めもりちゃん♪勝つのはどっちかなー？」

「！？」
“初代”めもり？“二代目”めもり！？
わけがわからない。何が起きているのかさっぱり理解できない。

『美少女ヒーロー☆めもり』にそっくりな女の子がこちらに向かってくる。
「もう、何がなんだか……」
何故この女の子は、森の中から出てきたんだ？
女の子が走りながら拳を構える。
物凄い速さだ。気が付けば俺の目の前で拳を繰り出そうとしている。
しかしこの時の俺に、ガードするか、避けるかの二択を選ぶ余裕などなかった。
目の前の状況を理解しようとすることで精一杯だったのだ。
そうだ、これじゃあまるで森が――

「なに……やってるんです、先輩……」
「……森……」
いつの間にか立ち上がり、俺の前に入り込んでいた森が女の子の拳を受け止める。
「言ったでしょう……？こいつは私の、私から生まれたトラウマーです……」
肩で息をしながら、俺を睨みつける森。
「先輩では……勝てません……」
「……こいつは、このトラウマーの姿は一体……」
「……これは」
俺がもっとも理解できない問いに、苦し気に答える森。
「これは……私のトラウマの姿……」
苦し気に、しかし懐かしむように、目の前にいる女の子を見る。

「私が……『美少女ヒーロー☆めもり』だった頃の姿です……」

「は……！？」
あまりの衝撃的な一言に、俺はあまりに当たり前の――いや、当たり前と呼ぶには、あまりに単純で短い返答しかできなかった。
「何……言ってるんだよ……」
森が、『美少女ヒーロー☆めもり』だった？
そんな馬鹿な。
森が、めもり？
そんなわけないだろ。
「うふふ♪よく言えました♪偉いですね、“初代の抜け殻”ちゃんは♪」
心底嬉しそうなメンコ。
こいつは知ってたってのか……？
こいつが知ってて、何で俺は知らないんだ……？
「……そうだ、あの時に聞いたじゃないか」
「……」
「あの時、俺が聞いて、違うって。そう言ってたじゃないか」
「……」

“めもり”が森の名前であったことに当初疑問を抱いた俺は冗談半分で聞いたことがある。実はお前がめもりなのではないか、と。
しかし森は、いつものように馬鹿なことを言わないでください、と俺の腕をねじって、それで、
「私が考えて、作り出したヒーローなんですから、自分の名前くらい使ったっていいでしょう」
いつも通り冷静に、そう答えていたじゃないか。

なのに何で。
嘘だったのか？なら何で嘘をつく必要があったんだ？
トラウマ……と何か関係があるから？
めもりになって、ヒーローになって、トラウマになるようなことが起きて……？
「……ッ！？」
頭に鈍痛が走る。
ヒーローになって、トラウマに……？
何だ？この感覚。“思い出すべき”であることが思い出せない。
俺の中でとても大切な何かを忘れているような感覚に陥る。
何だ？森のことなのか？それとも――

「……すみません、先輩」

俺の思考を、森が遮断する。
「……すみません」
「……森」
「ただ今は、この状況をなんとかする方が先決です」
「……けど」

「この闘いが終わったら、全て、話します」
「……本当だな？」
「約束します、今度は本当に。嘘はつきません」
森は拳を押さえながら、首だけを回し、無理矢理な体勢のまま俺の目をしっかりと見てそう告げた。
「……わかったよ」
その代わり、終わったら全部話せよ。そんで大人しく俺に説教させろ。
隠し事なんて、水臭すぎるだろうが。
「……ありがとうございます」
安心したように微笑み、再び前を見る森。
「で、どうする？」
「このトラウマーは私がやります」
「いや、それは……」
そいつはお前のトラウマーだろ？自分のトラウマと闘うなんて、酷すぎる。
「先輩では勝てません」
またそれかよ。
「それに……自分自身のトラウマーだからこそ、私の手で、倒したい」
森は力強く、そう呟く。
「……そうか」
どうやら、もう決めちまってるみたいだな。
「わかった。じゃあ俺の相手は、あの馬鹿デカいトラウマーだな」
ようやく冷静になってきたところで忘れかけていたあっちのトラウマーの存在を思い出した。
そもそもあいつだって十分手強い相手だ。
「ありがとうございます、先輩」
「よせやい。お前から感謝されるなんて気味が悪い」
素直に感謝の言葉を述べる森に俺は照れ隠しの嫌味しか言えなかっ

た。
調子が狂っちまう。お前は毒舌吐いてる方が丁度いいんだよ。
「じゃあ、いくとしますか」
「あと先輩」
「ん？」
「口調、直してください。気持ち悪いです」
「……はいはい、これでいいかしら」
ほらな、それくらいがお前らしい。

「集まれ星々の光！メモラアルタクト！」

地面に落ちているＳＭＡＷロケットランチャー、メモレアルタクトが消え、代わりに約２００もの剣、メモラアルタクトが現れ、地面に突き刺さる。
武器は重複して出現させることができないため、１種類に限られる。
森は最初、俺の闘いを考慮してメモレアルタクトのままでいいと言っていたが、何せ森の相手が森自身のトラウマーだ。
森と同程度の超人的な身体能力を持つであろう相手に遠距離型のメモレアルタクトは明らかに不利だ。

「めもり……」
「ん？」
少年が不安そうな目で俺を見ている。
「大丈夫、すぐに助けるから」
「勝てるの？」
「当たり前でしょ？」
地面に突き刺さっている剣を右手で１本、左手で１本、引き抜く。

「世界の平和は私が守るんだから」
俺はヒーローだからな。
「ぶおおおおおおお！」
「おっしゃあああ！」
巨大なトラウマーの身体を一気に駆け上る。
変身前ならいざ知らず、今俺は『美少女ヒーロー☆めもり』なのだ。
これくらい訳もない。
「ぶおおおおおおお！」
トラウマーが手で俺を払い落とそうとする。
「邪魔！すんなやー！」
手のひらを力の限り蹴り飛ばす。
轟音と共に手は弾かれ、トラウマーは予想外の力に身体のバランスを崩しかける。
「！？やった！できるじゃん！俺！」
不可能だと思っていたことが今ならなんでもできる気がする。
このまま一直線にダッシュだ。
「待ってろよデカ顔面！」

俺の作戦はこうだ。
（おそらく）トラウマーといえど急所はある。
だとするなら、（多分）眉間に刀を刺されればきっと死ぬとはいかないまでも大ダメージを与えることができる。
１本で足りないなら１００本刺す。以上。

「大丈夫、きっとなんとかなるはず」
どこから湧いてくるのかわからないがとにかく今の俺には強大な自信がある。
なんとかなる。なんとかしてみせる。森だって、きっと……
「……森……」
走りながら、森の方を横目で見る。

ここからでは二つの影が物凄い速さでぶつかったり離れたりしている、程度にしかわからないが、どうやらあっちの戦闘は予想通りかなり激しいものらしい。
「大丈夫……」
森がやるって言ったんだ。だったら信じてやらねえとな。あいつは俺の後輩であり、マネージャーであり、そして一緒に世界を守るパートナーなんだから。
森によれば、『ウール三姉妹』もとい『ウール三兄弟』最後の一人メンコ、ではなくメンオはトラウマーを生み出すことに関してはかなりの脅威だが、奴自身の戦闘能力は俺の変身前とさほど変わらないらしい。
そしてメンオを倒したところでトラウマーが消えるわけではない。つまり、俺は俺の、森は森の相手を倒せばどうにかなる。
後はメンコが妙な真似をしないか時折見張っていればなんとかなるはず。
「メンオは……いた」
森達から少し離れた場所で闘いを見ているらしい。のんきな野郎だ。

「んー、めもりちゃん同士の闘いを見たかったんだけどなあ……まさか抜け殻がめもりちゃんと闘うなんてねえ……」

「よし！あと少しで――」

「つまんないや♪あっちのガキの方は消えちゃえ♪」

その時突然、“足下”が消えた。
「……え……？」
いや、“巨大なトラウマー”自体が消えたのだ。
「う、うわあああああああああああ！？」
何だ！？何が起きた！？
今日は俺の理解を超えることばかり起きやがる。
今日という日に何か意味でもあるってのか？
「あああああああああああああ！！」
今まで駆け上っていたもの自体が消えたので、当然足場を失った俺は落下し――
「先輩！」
地面に激突するすれすれで森に見事キャッチされた。
「も、森……」
大きな衝撃もなく、森の腕に支えられている俺の身体。
相変わらず凄い奴である。俺だったらこんなに格好いいことは絶対に真似できない。
つーかあんな激しい戦闘から抜け出してきたってのか。つくづくこいつは俺のヒーローだな。
「た、助かったよ……」
ゆっくりと地面に降ろされる。
「って、そうだ！何が起きたの！？」
「突然、男の子のトラウマーが消えました。おそらくは奴の仕業かと」
森はそう言ってメンコを睨みつける。
「うふふ♪」
妖艶な笑みを見せるメンコ。
「ウチはトラウマーを生み出すことができるのよ？その逆もまた然り♪」

「自在にトラウマーを消すこともできるっての……？」
トラウマーを消すこともできるなんて、そんなのまるでヒーローの力じゃねえか。
「けどぉ、あなた達みたいに“倒して消す”わけじゃないの♪」
俺達の後ろを指差すメンコ。
「何、を……」
振り返ると、そこにはあの少年、巨大なトラウマーの主である少年が、倒れていた。
「少年！？」
すぐに駆けつけ、呼び起こそうとするも少年の意識はなく。
「ウチの“消す”っていうのは、そのトラウマーの主のトラウマに関する記憶を全部すっぽりと消しちゃうってことなの♪」
……記憶を、消す？
「記憶を突然すっぽりと消されちゃったから、ショックで気絶しちゃったのね♪」
……この子の悪い思い出だけを消したってのか？
「もしかしたら、その反動で他の関係ない記憶も消えちゃってたりして♪」
「なんてことを……！」
森が悲痛な声を上げる。
「いいじゃない、悪い記憶なんて綺麗さっぱり忘れた方が幸せなのよ♪」
「それを決めるのはアンタなんかじゃ……！」
森が声を荒げる。しかしメンコは一層可笑しそうに笑う。
「あはははは♪あなたがそれを言えるのかしら？」
「……ッ！それは……ッ！」

森が何か言いかけた時、森のトラウマーが目の前に現れ、
「森！？」

「……しまっ……」

右肩から腰にかけて、森を斬りつけた。

「森！！」

「私が見たいのは、めもりちゃんとめもりちゃんの闘いなの♪」

俺の横で膝をつく森。

「おい森！！」

「大丈夫です、避けました……右肩を少し斬られましたが……」

「避け切れてないだろ、血、流れてるじゃねえか！」

手を貸そうするもすぐに手を払われ、

「……それより、早く逃げて……！」

俺をここから逃がそうとする森。

どうしてお前が俺の心配してるんだよ。

怪我してるのはお前じゃねえか。

「先輩！早く！」

そもそもどうして俺より強いはずの森が怪我なんかしてるんだよ。

「先輩！」

どうして俺が逃げるんだよ。

どうして男の子は倒れてるんだよ。

どうしてお前はそんなに苦しそうにしてるんだよ。

どうしてこんなことになったんだよ。

どうして。どうして。

どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどう
してどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして
どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどう
してどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして
どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどう
してどうしてどうしてどうしてどうしてどうして――

「全部、俺のせいだろ」

次に気が付いた時、森のトラウマーとメンコは倒れていた。

「……全部、先輩が一人でやりました」

「たった一発、殴っただけで」

俺の変身は解け、代わりに――

「集まれ星の光、メモロアルタクト」

変身ベルトを付け、『美少女ヒーロー☆めもり』になった、

森めもりがそこにいた。

「……こんなつもりじゃなかった」

森は、目に涙を浮かべていた。

「ごめんなさい、先輩」

美少女ヒーロー☆めもり　ｅｐｉｓｏｄｅ９

「こんなつもりじゃなかった」

森めもり

「集まれ星の光、メモロアルタクト」

鈍い光と共に、森の手に一冊の本が現れる。

「……ッ！」

また頭に鈍痛が走り、今度は誰かの声が聞こえる。

「この本は……先輩の記憶です」

「……記憶……？」

今の声……森？

「そうだ……その本、前にどこかで……」

前にも今と同じようにその本を持った森が俺に話しかけていて――

「……こんなつもりじゃなかった。こんな形で、先輩に記憶を返すつもりじゃなかったのに……」

消え入りそうな声で森が呟く。

「……森……？」

一体どうなってるんだよ。“記憶”って何なんだよ。

「ごめんなさい、先輩」

「！」

森は、目に涙を浮かべていた。

「さようなら」

「森――」

視界が光に包まれる。

眩しくて、とても目を開けていられない。堪らずに俺は目を閉じる。

「あの、すみません」
「ん？どうかしたか？お嬢ちゃん」
「……私、お嬢ちゃんって言われる年齢じゃないんですけど」
不機嫌そうに学生手帳を見せる森。
「１７！？こ、これは失礼した」
確かこの時の俺は、１７でも十分お嬢ちゃんだろ、とかそんなこと考えてたっけ。
「……で、俺に何か御用ですか、“お嬢さん”」
「……お願いがあるんです」
「お願い？」
「はい、ヒーローになっていただけないかと」
「……へ？」
我ながら見事な間抜け面である。

昔から腕っ節が絶望的に弱く、運動神経０で身体の丈夫さだけが売りだった俺は、この時、２０を過ぎて「ヒーローは１０代の若さが売りの１つ」という謳い文句に追い立てられ、このままヒーローとして生き続けることを半ば諦めかけていた。
そんな俺にとって、森が放った一言は夢か幻、はたまたドッキリか新手の詐欺ではないかと疑うほどに信じられないものだった。

この世には「ダークケイト」という悪の親玉がいて、その存在に気付いた森は変身ベルトを自ら作り出すが、どうやら自分では変身できないということが分かり、途方に暮れていたところ、偶然俺が通りかかり、この人がヒーローに相応しい、という直感の元、こうして頼んでいる次第である、頼れるのは最早俺だけ。どうか世界の平和を守ってくれないか、というかなり胡散臭い説明に当初は疑いの眼差しを向けていた俺だったが……

「このベルトを付けて、『変☆身』と叫んでください」
「これが変身ベルト！？すんげーデザインって痛い痛い痛い痛い痛い！」
「早くしないとこのまま腕がねじ切れることになりますが」
「わかった！わかったよ！」
「へ、へん……しん……」
「切れますよ、腕が」
「だー！わかったわかったやればいいんだろ！へ、変☆身」

その後、変身ベルトから無数の星が散りばめられ、それは右腕やらなんやらを覆って、見事俺は美少女ヒーローになるわけだが、もうこれ以上己の黒歴史を見るなんて耐え切れないので割愛させていただく。

「……やっぱり、あなたに頼むしかないみたいですね」
「……マジですか」
「お願いします」
「……マジか……」

とにかく、これで晴れて『美少女ヒーロー☆めもり』は誕生したわけである。

それから俺は、２４歳のもうすぐおっさんと呼ばれてもおかしくない年齢で見た目――というか設定上、１７歳の美少女ヒーローをやることに日々、黒歴史が次々と生まれていく様に並々ならぬ後悔を感じながらも森に脅されたり、助けてもらったりして、なんだかんだでヒーローとしてやっていくわけだ。

そう、これは俺の記憶。

どうやら今俺は、自分の記憶を見ているらしい。
これが森の使った『メモロアルタクト』と呼ばれるあの本の力によるものなのなら、俺はこれから、さらに昔の記憶を見ることになるのだろう。
そもそも今思えばどうにもおかしなことばかりだ。
森が俺に変身ベルトを渡す時の話が強引すぎる。
それに、俺はいつから、何をもって彼女を“後輩”と認識していたのかわからない、というより覚えていないというべきなのか。
きっとこれらの謎は、森の“トラウマ”と何か関係があるに違いない。
「よし……！」
例えそこにどんな事実があったとしても……。
俺は知りたい。知らなければならない。

俺は更なる過去へと遡るため、記憶のページを読み戻し始めた。

「森めもり」

トラウマー達が次々と襲いかかってくる。
変身ベルトの星を右に回し、
「集まれ星の光！メモラアルタクト！」
１本の剣を左手に取る。
「邪魔……するな！」
力任せに剣を振るう。
２匹薙ぎ払い、１匹を蹴り飛ばす。
５匹まとめて右手で殴り飛ばし、１匹を斬る。
「どっけえええええ！」

きっと今頃先輩は全ての過去を見ているのだろう。
全ての記憶と、全ての過去を知って、あの人は何を思うのだろう。
私を、どう思うのだろう。

「わたしね、おおきくなったらヒーローになりたい！」

きっとそれは、珍しいことなんかじゃなくて。
誰にでもあるような子供の頃の夢。

「めもりさんじょー！」

いつか自分の元へ妖精が現れて、ヒーローになる。
そんな夢を抱いていた私が唯一、珍しかったこと、他人と違ったことは、その夢への執着心だった。
その執着心は呪いのように私の心につきまとい、中学生になっても夢を諦めることはなかった。

しかし、思春期の心には夢と同じくらいに、むしろそれ以上に、現実いう名の壁が現れ始める時期でもある。
まだかまだかといくら待ちわびても、一向に私の前に妖精が現れる気配はない。
「ひょっとして……このまま私はヒーローになれないの……？」
容赦なく現実は私の心を弱らせていく。
そして高校に進学した年。追い詰められていた私は、何を思ったのか友人にこんなことを口にしてしまうのであった。

「……ねえ私ってさ、ヒーローになれると思う？」

今思えば、きっと誰かに聞いてもらいたかっただけなのだろう。
家族を疎ましく思う、反抗期真っ只中だった私は、唯一自分のことをわかってくれる存在であると思っていた、学校の友人に自らの悩みを打ち明ける。
すると友人は冷たい目で私を見て、こう言い放った。

「めもりあんた、さ、何言ってんの？」

高校生として、当然の反応。
現実にヒーローという存在はいても、それになれる人なんて世界中で数えるほどだけ。
夢物語を丁度見終わった女子高生にとっては、その言葉が酷く滑稽なものに聞こえることを予想することも、理解することも、その時の私には到底できるはずもなかった。

翌日から学校に私の居場所はなくなった。

そうして私の“トラウマ”は生まれた。

『美少女ヒーロー☆めもり』を夢見た私は、その強すぎる想いに自ら身を焦がし、その想いはそのまま“トラウマ”という形へと変化してしまったのだ。

「はあ……はあ……」
重く巨大な扉を開ける。
「よく来たね」
玉座に座っている少女。
「歓迎するよ、めもりちゃん」
無邪気な顔で笑うその少女の名は――ダークケイト。
全ての元凶。『ウール三兄弟』や『トラウマー』を束ねる、最悪の王。
「……歓迎される謂れはないわ」
「何言ってんのさ、僕達、“仲間”じゃないか」
さも予想外の言葉を聞いたと言わんばかりに驚いた素振りを見せるケイト。
「……仲間だって言うなら表のトラウマー達は一体何だったのかしら」
「君に会うのも久々だからね、称号に見合った強さは健在なのか確かめさせてもらったのさ」
「……こっちはそんな称号貰った覚えもないし、貰うつもりもない！」
思わず声を荒げる。
「まあとにかく、君の強さは健在だった。安心したよ」
「黙れ！」
「“最強”の称号はやはり君が持つに相応しい」
「そんなもの私にはいらない！」
「自らをトラウマー化することのできる“最強”の人間」

「おかえりなさい、僕の可愛いめもり」

学校に居場所がなくなった私は登校することも少なくなり、家に引きこもるようになった。
初めこそ口うるさくしていた親もいつしか諦め、やがて何も言わなくなった。
毎日起きて、用意されたご飯を一人で食べ、ネットをして、寝て。
そんな生活を送ることに時折酷い後悔と罪悪感を感じながら、けれど何もできず、数ヶ月が経ったある日のこと。

「なに……これ……」

夕方、起床し家に誰もいないことを確認した私は3日ぶりのシャワーを浴びようと洗面所に行き、鏡を見た瞬間、数ヶ月ぶりに声を上げた。

「……これ、私……？」

青を基調とした、可愛いワンピースに手袋、ブーツを履き、星の髪飾りを付けた、紺色の髪のポニーテールで、大きな瞳、長いまつ毛。鏡に映る私は確かに、あの日夢に描いた『美少女ヒーロー☆めもり』の姿となっていたのだ。

「……私……ヒーローになれた……『美少女ヒーロー☆めもり』になれたんだ！」

私が夢見たヒーローの姿は、“トラウマー化”という形となって私を、優しく、そして残酷に包み込んだ。

「やった！やったあー！！」

そう、『美少女ヒーロー☆めもり』は、私がトラウマー化した姿だったのだ。

「じゃじゃーん♪やっぱヒーローにはこれが必要よね！」

大きな星の付いたベルトを鏡の前で試着する。

「この中央にある星を回すと、武器が出てくることにしよう！」

「……掛け声はそうね、集まれ星の光！……とかでいいかな」

何の迷いもなく、自ら“作った”ベルトと初めての武器『メモリアルタクト』は、私の興奮をより一層かき立てた。

私はついに夢を叶えたんだ。

皆が笑い、蔑んだ私の夢を、私は自分の手でつかみ取ったんだ。

これで誰にも笑われない。私はヒーローなんだ。

「お姉ちゃん……だれ？」

「私は、めもり。『美少女ヒーロー☆めもり』よ！」

人々の悪い思い出から生まれる怪物『トラウマー』と闘いを繰り広げる日々はすぐに始まる。

「ありがとう！めもり！」

「当然よ！世界の平和は私が守るんだから！」

私はヒーロー。皆をこの世の悪から守る者。

そのためだったら、何でもできる。
誰にだって負けない。

私は何故『ヒーロー』になれたのか。何故『トラウマー』を知ったのか。
『ヒーロー』とは何なのか。
そんなことはもうどうでもよかった。
今、自分がある“姿”を見て、心の奥にある“何か”を見ずに。
ヒーローだから、と思い込んでなんとなくトラウマーと闘って、なんとなく勝って。
あの日の引きこもっていた、死人のような自分に戻らないために。
与えられたものに、“与えられたと思い込んだ”ものになんとなく従って、私は闘い続けた。

そして、ある日。

忘れもしないあの日、

私は、『赤井正太郎』という一人の男と出会うこととなる。

赤井正太郎

「……どういうこと……？」

その日、いつものように私はトラウマー出現を感知した場所へ出向いた。

するとそこには、

「ありがとう！おじさん！」

「おじさんじゃなくてお兄さんだっつーの！」

見知らぬ男と少年、そして、倒されたトラウマーがいた。

「あ！めもりだ！」

「ん？めもり？」

私に気付き、こちらへやってくる二人。

「めもり遅いよー！このおじさんが先にやっつけてくれちゃったよ！」

「だからお兄さんだっつーの！」

「……誰？あなた」

訝し気に素性を問うと、その男は、快活な声でこう答えた。

「俺の名前は赤井正太郎！ヒーローやってんだ！」

「……え……？」

ヒーロー？この男が？

「え！？おじさんヒーローだったの！？」

「おいおい！どっからどう見たってヒーローだろうが！」

「えー！？だって変身してないじゃん！」

そうだ、変身しないヒーローなんてヒーローじゃない。

「いいんだよ！俺は変身しなくたって強いんだから！」

「えー？」
変身しなくても強い？まさかこの男、素手でトラウマーを倒したの？
「で、あんたこそ誰なんだ？めもり、とか呼ばれてたけど」
「え！？あ、私は……」
「おじさん知らないの！？『美少女ヒーロー☆めもり』だよ！」
「へえ！あんたもヒーローなのか！」
「……ま、まあ」
「トラウマー達といつも闘ってるんだよ！」
「トラウマーってさっきの怪物か？」
「そうだよ！おじさん本当に何にも知らないんだね！」
「うるせーなー」
この男、トラウマーの存在も知らずに闘って、それで勝ったって言うの……？
「ね、ねえ……」
「なんだ？」
「あなたも……ヒーロー、なの？」
「ああ！まあヒーローっつっても、不良をこらしめたり、ばあさんの荷物運び手伝ったり、地味な仕事ばっかだけどな！」
そう言って男は苦笑いしながら頬をかく。
「今日も、たまたまパトロールしてたらこの少年が変な怪物に襲われてて――」
不良をこらしめる？荷物運びの手伝い？
そんなのヒーローがやるようなことじゃない。
ヒーローはこの世の悪と闘って世界の平和を守るためにいるんだ。
この男はヒーローなんかじゃない。私は絶対に認めない。
ヒーローが二人もいるなんて――
「まあ同じヒーロー同士さ、仲良くしようぜ」
「え？わわっ」
無理矢理握手をさせられる。私は認めたわけじゃないのに。
「じゃあ、またな」

「あ、ちょっと……」
「あ、それと」
「え？」
「俺２４歳。お前は？」
「……１７だけど」
「じゃあ、俺を呼ぶ時は、『先輩』って呼べよ？めもり後輩」
「は、はあ！？」
「返事は？」
「……わ、わかりました、先輩」

なんて強引な男なんだ。

それからというもの、赤井正太郎はことあるごとに私の前に現れた。

「よ！」
「……」
「こら！なんで無視すんだよ！」
「……何で私の隣を走っているんですか」
「また例の、とらうまーだっけ？そいつの退治に行くんだろ？」
「……だったらなんですか」
「俺も行く！」

「……結構です」
「ちょ！待てよ！」
「……念のため言っときますけど、全く、似てないですからね」
「物真似じゃねえよ！って、おい！」

私がトラウマーとの闘いへ向かおうとすると必ずと言っていいほどいつも彼は現れた。

「へーお前強いのな」
「……当たり前じゃないですか、私、ヒーローですよ？」
「……にしてもその格好はちょっとアレじゃないか？」
「……アレ？」
「いや、だって、ほら、スカートが短いから……」
「……？……だからなんです」
「激しい動きすると見えるんだよ……中が」
「……ッ！……ねじり切る！」
「ちょっと待て！どこを切るつもりだ！」
「腕です！変な勘違いしないでください！」
「何赤くなってんだよ！待て！待て！」

かといって、私の邪魔をするわけでもなく。

「ありがとう！めもりちゃん！」
「どういたしまして」
「さすがめもりだな！」
「……おじさん、誰？」
「俺はこいつの仲間だ！あとおじさんじゃなくてお兄さんな！」
「そうなの？めもりちゃん」
「私もこんなおじさん知らないよ。さ、帰ろうね」
「うん！」
「ちょっと待て！あとおじさんじゃなくてお兄さん！」

「……先輩」
「ん？」
「……先輩は……その、いつも見てるだけですよね」
「だってお前一人で十分倒せる敵だろ？」
「……それはそうですけど。……なんていうか、先輩は、闘いたくないんですか？」
「？」
赤井は私の言っていることがまるでわからないという顔をする。
「一応……ヒーローなのに。悪と闘うのがヒーローでしょ？」
「俺だって悪と闘ってるぞ？」
「……先輩の言う悪はその辺の不良でしょう」
「その辺の不良だって何の罪もない人達に悪さするだろうが」
「……いや、それはそう、ですけど……」
「お前のやってることと俺のやってることなんて大した差もないと思うけどなー」
「……はあ……もういいです」
一緒にされるなんて心外だけど、これ以上何か言ったところで無駄だろう。
聞いた私が馬鹿だった。
「それにさ」
そんな私の徒労感をよそに赤井は爽やかな顔で、
「なんつーか、仲間の仕事を見てるとさ、安心できるんだよ。俺は一人で世界の平和を守ってるわけじゃないんだって」
そう私に告げた。

仲間。
友人に自分の夢を否定されて以来、私はずっと一人だった。
トラウマーを倒し続けてきたことで私の名は広まり、街を歩けば皆

に感謝される。あの頃とは違う毎日。
けれどどんなに感謝され、羨望されたとしても、私が一人であることに変わりはなかった。
喜びを分かち合える人。私の隣を歩いてくれる人は誰もいなかった。

そんな私に、赤井が告げた『仲間』という言葉は、心に深く響き渡った。

「……先輩と一緒にしないでください」
「なんでだよー同じヒーローじゃねえか」
「先輩と私ではヒーローレベルが違うんです」
「ヒーローにレベルなんてあんの！？」
先輩を『ヒーロー』として、完全に認めたわけじゃないけれど、
「そんなことも知らないなんて、先輩は駄目駄目ですね！」
「なんでそんな嬉しそうに罵倒すんだよ！」
「べ、別に嬉しくなんかありません！」
「さてはお前Ｓだな！」
「ち、違いますっ！」

こんな毎日が続くのなら、ヒーローが二人いるのもそう悪いことでもないのかもしれない、そう思っていた。

しかし、そんな日々も長くは続かない。

心に、誤摩化しは決して通じないのだ。

「今日もおつかれさん！ほいタオル！」
「いりません、汗かくほどの相手じゃなかったですから」
「そうか？割とぎりぎりだった気もするけど……」
「そう思ったのなら手伝ってください。本当に見てるだけなんて役立たずもいいところです」
「……」
いつもなら何か言い返してくるはずの先輩が今日は何も言わない。
「……先輩？」
不穏に思い、顔を見ると、先輩は深刻な眼差しで、
「……お前さ、最近身体の具合でも悪いの？」
そう告げる。

「……？別にどこも悪くないですけど」
年中無休のヒーローが体調を崩すなんてもっての他。
体調管理も仕事のうちだ。
「いや、なんか、最近お前……弱くなってない？」

「……は？」

予想外の言葉に思わず間抜けな声を出してしまう。
「俺の気のせいかもしれんが、なんか、動きが鈍ってるというか……」
動きが鈍っている？私が？
「そんなはず……」
確かに今日は少し苦戦したかもしれないけど、それはトラウマがいつもより強かっただけで――
「でも今日ぐらいの奴、今までのお前なら楽勝だったはずだろ」
そんなわけない！先輩は闘っていないからわからないんだ。
「先輩にはわからないかもしれませんけど、今日のトラウマーはいつもより強かったんです！」
思わず声を荒げる。
「いや、でも」
「……闘ってもいないくせにわかったようなこと口に出さないでください！」
声が響き渡り、静寂が流れる。
何、言ってんだ……私。
我に返り、後悔の波が押し寄せる。
「……めもり」
先輩が戸惑いながらも私に声をかけようとする。
「……それは……確かに、そう、だけど、でも」
「私は弱くなんかなってません！」
先輩の言葉を振り払うように一層大きな声を上げる。

しかし――

「いや、その人の言ってることは正しいよ」

幼い少女の声が、私の言葉を静かに振り払う。
「せっかく“最強”の称号を持つに相応しい子を見つけたっていうのに……」
私達二人にゆっくりと近付いてくる少女。
「『トラウマ』が弱まってるじゃないか。めもりちゃん」
「何……なのよ……」
全てを見透かされているような目線に、思わずたじろぐ。
「誰だお前。こいつに何の用だ」
尋常じゃない雰囲気に、先輩も緊迫した口調で問いかける。
「何の用ってめもりちゃんを迎えに来たんだよ」
「めもりを？迎える？」
庇うように私の前に立つ先輩。
「……あんた、誰よ」
私の問いに無邪気な笑顔でその少女は、
「僕はダークケイト。トラウマー達を束ねる王だよ」
恐ろしい言葉を口にする。
「王……？」
じゃあまさか、こいつが悪の親玉……？
「……その王が、めもりに何の用だってんだ」
「だから迎えに来たって言ったじゃないか」
私を……迎えに……？
「だって、僕達は仲間じゃないか」
「……え……？」
仲間……？何、言ってるの……こいつ……・

「はあ！？何言ってやがる！めもりはお前を倒して世界の平和を――」
「君こそ何言ってるの？」
私の心の奥の“何か”がざわつく。
これ以上先を聞いてしまうと、取り返しのつかないことになってしまう、そんあ気がする。
「めもりちゃんはトラウマー化できる“最強”の人間じゃない」
トラウマー化？トラウマー化って何？
あの怪物、私がこれまでに闘ってきた、あいつらと何か関係があるの？
「そのめもりちゃんの今の姿がトラウマー化した姿だよ？」
この私の姿がトラウマー化した姿？
私は、あいつらと同じ、なの……？
「……なんだよトラウマー化って……」
「……通常、悪い思い出から生まれたトラウマーはその主から分離するんだけど、中にはそのトラウマーと自分を融合させることができる人もいるんだ」
やれやれと面倒くさそうに説明する少女。
「それが……めもりだってのか……？」
「そだよ。その姿も、身体能力も、魔法じみた特殊能力も、そして『トラウマー』や僕の存在に気付いたことも全て、めもりちゃんの『トラウマー化』が起因。いや、それらを望んだ故の『トラウマー化』と言ってもいいかもしれないね」
「そんな……まさか……」
「僕の所にはそんな人々が集まってる。だからめもりちゃん、僕の所においでよ。君のことをわかってくれる“仲間”がそこには大勢いるんだ」
少女は優しく、そして残酷に私へ手を差し伸べる。
私をわかってくれる？この人は私をわかってくれるの？
この人が私の、“仲間”なの……？

吸い寄せられるように私は少女の手を取ろうと手を延ばし、
「ふざけんな！めもりはお前達の仲間じゃねえ！俺の仲間だ！」
先輩にそれを、遮られる。
一転して光のない、真っ黒な目で先輩を睨む少女。
「……そうだね、君がいたんだ」
「めもりは渡さない」
「君がいたから、めもりちゃんは弱くなったんだ」
「……あ？」
「君がいたからめもりちゃんの『トラウマ』は徐々に弱まっていった。君が“勝手に”めもりちゃんのトラウマを消そうとしたんだ」
「……ッ！ふっざけんな！！」
「もうやめて！先輩！」
少女の胸ぐらを掴む先輩を止める。
「……もう、いいの……」
「めもり……？」
「……もういいの、先輩……」

私の心の奥にあった何か――『トラウマ』が湧き出てくる。
あの日しまい込んだ気持ち。
ヒーローを夢見る気持ち。ヒーローを目指しても無駄だとわかった時の気持ち。
それでも誰かに縋ろうとして、突き放された時の気持ち。
そして。
例えそれが、見せかけの希望だとしても、それに縋って、縋るしかなくて。
ずっとそれに気付かないふりをしてしまい込んでいた気持ちが溢れてくる。

『美少女ヒーロー☆めもり』は私の『トラウマ』の形。
この姿も、武器も、身体能力も、トラウマーを感知する能力も。

全て私が『トラウマー化』したことによって作り出した、見せかけの希望。
「そいつの言ってること……全部、正しいから……」
私の演じる『ヒーロー』は全て見せかけの嘘だった。
わかっていた。そんなこと初めから、わかっていたことなのに。
「だから……もう……」
目の前が真っ暗になり、立っていられなくなる。
今まで押さえ込んでいた闇が、光を飲み込んでいく。
「けど！お前の想いだって正しいはずだろ！？」
「……おもい？」
「世界の平和を守りたいって想いは！嘘なんかじゃないだろ！？」
「せかいを……まもりたい……？」
嘘だった？嘘だったの？
「……わからない……」
わからない。わからない。
「……わかん、ない……」
わかんない。もうわかんないよ。
「めもり！……っぐ」
「……これ以上僕のめもりちゃんを汚さないでくれるかなー？」
私への呼びかけを断ち切るように、胸ぐらを掴んでいる先輩の腕を少女の小さな手が握りしめる。
幼い子供の手に掴まれたとは思えない、鈍い音が響き、
「……くそ！」
思わず少女を突き放す先輩。
「困るんだよね、勝手なことばかりされると」
「めもりはお前のものでもなければお前の仲間でもない！めもりは、俺の仲間だ！」
「……ふーん」
少女の目線が先輩へと向けられる。
先ほどまで私へ向けられていた目線と同じ、まるで心の中を見透か

すような、気味の悪い目線。
そうだ……この目線は私に向けられていたものと同じ――
「やめて！先輩は関係ない！」
“めもりちゃんは君の仲間”か。なかなか言い得て妙なり、だね」
「……は？」
「やめて！」
「赤井正太郎、生まれついての才能と幼少の頃からのたゆまぬ努力
……君は正しく、“姿形など変えず”とも“ヒーロー”だよ」
「な、何を……」
「けれど、そのあまりに真っ直ぐ過ぎる才能と努力によって、君は
過去に一度過ちを犯しているね」
「……！！」
先輩の目が、大きく見開かれる。
顔色はみるみる悪くなり、その拳は震えている。
「先輩！」
そいつの言うことに耳を傾けては駄目だ。
心が闇に、トラウマに、飲み込まれてしまう。
「そう、君は――」

少女が喋り終わるや否や、先輩は再び彼女の胸元を掴み、
震える拳で、彼女の顔を、胸を、腹を、腕を、脚を、
何度も何度も何度も何度も、
何度も何度も何度も何度も、
血が枯れ果てるまで殴り続けた。
その間、殴られている少女は、

「あははは！あはははは！あはははは！あはははは！」
心から可笑しいと言わんばかりに、その幼い声が枯れ果てるまで笑い続けていた。
「あはははは！あはははは！あはははは！あはははは！」
私はただそれを、見ていることしかできなくて。
ただただ殴り続ける先輩と、笑いながら殴られ続ける少女を見ていることしかできなかった。

そうして最期に、その少女は確かに、私の方を見て、こう言ったのだ。

「僕はここで“死ぬ”けど、すぐにまた“戻ってくる”よ」
「だって、僕はいつだって、誰よりも君の側にいて、当たり前にそこにいる存在なのだから」

気付いたとき、その少女は俺に胸ぐらを掴まれたまま、息絶えていた。
俺の腕は、顔は、身体は、その少女の血で、真っ赤に染まっていた。

「そう、君は、過去にその手で人を殺しているね」

同じだ。あの時と。
少女が息絶えるまで殴り続けた不良を俺は、息絶えるまで殴り続けたんだ。
心の奥底に眠る、あの日の記憶が鮮明に蘇る。

「全部、俺のせいだろ」

「全部、俺が悪いんだ」

自分の力を、自分が積み重ねて来たものを心底憎んだ、あの日の『トラウマ』が蘇る。

「うわあああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

「そうだ。全部、思い出したよ“めもり”」

俺はあの日、自分の積み重ねたものを否定したんだ。
自分は初めから何もできない、弱い人間だと思い込んで。
そう思い込むことでしか逃げることができなくて。

俺は、『トラウマー化』したんだ。

目の前の惨状の一部始終を見届けためもりは、ゆっくりと立ち上がり、
『美少女ヒーロー☆めもり』最終奥義の“魔法”を作り出す。
「……この魔法は“二度だけ”使える、『美少女ヒーロー☆めもり』の最終奥義」
変身ベルトの星を右に回すめもり。
「……そしてこの本は、先輩の記憶です」

光と共に現れた“この本”をそっと胸に抱き締めるめもり。
「いつか私が、世界の平和を守り切った時、ダークケイトを完全に倒した時、必ず先輩にお返しします」
その目からは、一筋の涙が零れ落ちる。
「ごめんなさい、先輩」

「集まれ星の光、メモロアルタクト」

『美少女ヒーロー☆めもり』になることができなくなった、そうなることを拒むようになった、そうなりたくなくなったためもりは、いつか来るであろう、自分の中の『トラウマー』が消えるその日まで、変身ベルトに自分の持てる力を全て詰め、

そしてあの日、再び出会った“先輩”に託したのだ。

『美少女ヒーロー☆めもり』復活の希望と『森めもり』の絶望を。

美少女ヒーロー☆めもり　episode11

「赤井正太郎」

「それにしたって、めもりちゃんはアレだね。律儀というか、用意周到というか」
「……何が言いたいのよ」
「自分が再び、その姿に戻るために、『ウール三兄弟』との戦闘を見据えた上で、彼に全てを任せる、いや、やらせると言った方がいいかな？すごい執念だと思うよ」
「……」
「でもね、めもりちゃん、君が再びその姿で僕の前に現れることはあの時からわかってたことだし、やっぱり君が僕の仲間だってこともあの時から変わってないんだよ」
「……何を……！」
「いくらメンオを利用して、君のトラウマーを引っ張りだして、彼に倒してもらったって、君は相変わらずその姿でいるじゃないか」
「……ッ！それは！」
「君の『トラウマ』は確かに形となって、君となっている、それは決して変わらない、否定しようもない、どうしようもない事実なんだよ？」
「……黙れ」
「君の『トラウマ』を彼に肩代わりしてもらったつもりでも、それはいつだって君の中にいるんだ」
「黙れ！黙れ！黙れ！」
「その証拠に君はいつだって『トラウマーを感知する能力』があっただろう？君の身体は、心は、いつだって仲間を捜していたのさ」
「違う！私は、私は……」
「君自身が、『君の中のトラウマは消えてなんかいない』という事実を、どうしようもなく体現してるんだよ」

「違う！私は！今の私は、絶望を身に纏ってなんかいない！」
「彼を散々利用しようと思ったのも、彼を常に側において、彼と自分は違うってことを自分が常に納得し続けたいがためのものだったんだろ？」
「……！！それ、は……」
「でも残念。君も彼も、そして僕も、皆同じ。皆等しく、皆僕と仲間ってだけだよ」
「……ち、違う！」
「頑固だな、めもりちゃんは。君からも何か言ってやってくれない？」
「……え？」

「そうだな」
わざとらしく俺に気付いた素振りを見せた少女、ダークケイトはようやくそこで俺を招き入れる。
「めもり。いくら否定したって、いくら遠ざけようとしたって、そいつはいつだって俺達の側に居続けるんだよ」
「……せん、ぱい……？」
俺の存在と俺の言葉に、信じられないという表情の森めもり。
「ただな、ダークケイト。それでも俺には1つ、どうしても受け入れられないことがあるんだよ」
「……へえ。一応、聞いておこうか」

「俺とめもりは仲間だけど、お前はやっぱり敵だ」

玉座の間に踏み込み、ケイトを指差す。

「お前は俺達にとっての倒すべき敵なんだよ」

美少女ヒーロー☆めもり　ｆｉｎａｌ　ｅｐｉｓｏｄｅ

「美少女ヒーロー☆めもり」

「うっす、遅くなって悪かったな」

めもりの元へ向かう。
「なに……やってるんです……先輩」
いまだ信じられないという表情のめもり。
「何って決まってるだろ」
目の前に座るダークケイトを一瞥し、

「こいつを倒しに来たんだよ！」

ヒーローお決まりの台詞を言い放つ。
どうだ、決まっただろう。
渾身のドヤ顔でめもりを見るも、表情はいまだ固く、
「……こいつは私が、倒します」
そう言ってケイトに突進しようとする。
「っと！待て待て！」
「離してください！私が倒します！倒さないと駄目なんです！」
「……だから……待てってば！」
めもりを羽交い締めにする。
しかしその力に勝てるはずもなく、めもりは俺を引きずったまま進もうとする。
くそ！これ以上押さえ切れん！
「ぐぬぬぬ……」
けどこいつをここで離しちゃ駄目なんだ。
「……誰が！俺一人でケイトを倒すっつったよ！」

「……え……」
めもりの力が緩んだ。
チャンス！
「どぉうりゃあ！」
「え！？きゃっ！」
めもりを無理矢理押し倒し、その上に馬乗りになる。
「せ、せんぱい！？」
「いいか、よく聞け！俺とお前、二人で協力してあいつを倒すんだよ！」
「え……」
「それしかあいつを倒す方法はない！そうしないと倒せないんだよあいつは！」
俺の必死さに一瞬きょとんとするもすぐに固い表情に戻るめもり。
「変身もしていない先輩に何ができるって言うんです？私を押さえ切れないってことは……その、『トラウマー化』だって解除されてないってことですよね？」
「ああ、そうだ」

そうさ、過去に二度、自分の力を呪った俺は、自らを弱体化させる『トラウマー化』をした。
その『トラウマ』は、今もまだ俺の心の中にある。

「だったら私一人で十分です。……いえ、私にやらせてください。私がやらないと、いけないんです」
めもりの頑な態度に、俺も流石にイラつき始める。
「お前！まだわかんねえのか！？」
「わかってないのは先輩の方です！私が……！どれだけ先輩に酷いことをしたか……！」
こいつ……やっぱりわかってねえ。
「いいかめもり！俺は――」

「わかってないのは君達二人だよ」
ダークケイトがそこへ割り込んでくる。
「……あ？」
「まったく……君達はいつまでたっても成長しない。馬鹿じゃないの？」
玉座から立ち上がり、こちらへ歩み寄ってくるケイト。
「全てを知った赤井君なら少しはわかってくれたのかなって思っていたけどとんだ見当違い。君もめもりちゃんも未だに僕のことを敵だと言う」
「そうよあんたは私の敵！だから私が倒すの！」
「……おい、めもり……！」
馬乗りにされた状態で暴れようとするめもり。
「あんたは私が倒す！倒さなきゃいけないの！」
「めもり！」
「……そうしないと、私は――」
「今まで散々利用してきた赤井君に申し訳が立たない、かい？」
「……ッ！」
めもりの動きが途端に止まる。
「そりゃそうだよねえ。君は、『トラウマ』が弱まるほどに自分と仲良くしてくれた大好きな先輩がトラウマー化しちゃったのに、その記憶を消して、なかったことにして、自分が立ち直るために、自分の心を保つために、側に置いて、自分の『トラウマ』を押し付けて闘わせてたんだもん」
「……」
めもりの顔がみるみる青くなっていく。
「その挙げ句、全てが終わってからの予定が、自分の計算ミスでよ

りにもよって、僕と闘う直前にその記憶を返しちゃったんだよね」
間抜けな話だ、と笑うケイト。
「そんなことがあって、その上僕を倒すのに協力してもらった、なんてことになったら、それこそ申し訳が立たないどころの話じゃなくなっちゃう」
「……そうよ！」
森は目に涙を溜めながら叫ぶ。
「私は今まで、散々自分のために先輩を利用して！それでここまできたのに！先輩を犠牲にしてやっとここまでこれたのに！これ以上、先輩に迷惑なんてかけられない！かけたくないのよ！」
……めもり。
「……先輩だって見たでしょ？自分の記憶を、私の記憶を。私がどれだけ先輩に酷いことをして、迷惑をかけたのか」
めもりの目から涙が溢れている。
これまで言いたくても、言えなかった、自分を呪う言葉がやっと言えた。
やっと吐き出せた。
そのことに安堵して、そして絶望しているのだろう。
「だから私は……！」
「！？……おい！」
急に起き上がられ、思わずバランスを崩す。
その隙に自由になっためもりはケイトに向かっていく。
「集まれ星の力！メモラアルタクト！」
光と共にめもりの手には剣が現れる。
「……お前を倒す！」
ケイトに斬り掛かるめもり。
「めもり！やめろ！」
駄目だ！今のお前じゃ――
「うわあああああ！」
勢い良く剣が振り下ろされ、静寂が流れる。

少しの間が空いて、
「本当に、馬鹿だね。めもりちゃん」
余裕の表情でめもりを見るケイトはいつの間にか人差し指を立てている。
その身体に傷はなく、
「君が僕に、攻撃を当てることができるわけないだろ」
めもりの振り下ろした剣の刃は真っ二つに折れていた。
「……そんな……人差し指1本で防いだって言うの……？」
「せっかく考えることができる頭があるのにそれをしようとしない。馬鹿は獣と同じ。『トラウマー』と同じだよ」
ケイトの人差し指がそのまま振り下ろされ、めもりを“斬る”。
「めもり！！」
「……――――ッ！！」
声にならない叫びを上げ、倒れるめもり。
「めもり！」
駆け寄り、めもりを抱き寄せると、
「……！……これは……」
ケイトに“斬られた”、肩から腰にかけての箇所が、真っ黒な傷のようになっている。まるで、黒い刀に斬られたように。
「……うう……」
そしてその傷口は真っ黒な血が溢れ出ていくように、徐々に周りへと広がり始めている。
「おい、めもり！」
「……すみ、ません……避けきれ、ませんでした……」
「……馬鹿野郎……！」

「その傷口から広がる真っ黒な血はね、めもりちゃんの心の中にある『トラウマ』だよ」
「……これが、私の……」
「君がいつまでたっても自分の中にある『トラウマ』を認めようとしないからね、わかりやすいように見せてあげようと思って」
「……こいつが広がり切ったらどうなる？」
なんとなく想像はつくけどな。
「さっき言ったろ？馬鹿なら『トラウマー』と同じって。せっかくの可愛い姿がもったいないけど、めもりちゃんにはこのまま『トラウマー』になってもらうことにしたんだ」
「……お前……」
「ちなみに、僕を殺したところで何も変わりはしないよ、この前みたいにね」
俺を見て微笑むケイト。
「……チッ」
わかってるよ、お前を殺したところで今の状況が変わるわけじゃない。
また繰り返すだけだ、この前と同じに。
「……そんな……私、このまま……トラウマーになっちゃうの……？」
「……めもり」
「このままだとね。さあ、どうする？赤井君」
「うるせえ。お前は黙ってろ」
そうさ。俺がこいつを倒したって、そこには何の意味もないんだ。
「……せん、ぱい……たすけて」
苦痛に顔を歪めながら助けを求めるめもり。
並大抵の痛みじゃないだろう。心をこじ開けられて、その痛みを無理矢理垂れ流しにされてるんだ。
「……めもり」
待ってろ。今俺が助けてやる。

「いいか、めもり。俺とお前、二人で協力してあいつを倒すんだ」
「……無理……だよ……」
「そうしないとお前は永遠に助からない」
「無理だよ……もう私には無理だよ……」
めもりはしゃくり上げて泣いている。
辛いんだろう、痛いんだろう。
けど、ここで諦めるわけにはいかない。
「めもり！」
こいつのためにも俺は諦めることはできない。
「……もう私を置いて逃げて……」
「そんなことできるわけないだろ！」
「先輩だって、見たでしょ……？私は……最低で……心から最低で……」
「そんなことない！」
「先輩を……利用するだけ利用して……それでも私の『トラウマ』は消えなくて……それに縋るしかなくて……」
血の広がる速度が急激に上がっていく。
上半身は全て黒に染まっており、今や顔にまで広がりつつある。
くそ、めもりの野郎、何馬鹿なこと言ってやがる。
お前は、俺と同じ、どこにでもいる普通の人間だろうが。
「もう……これ以上、迷惑かけたくないよう……」

「馬ッッッッッッッッッッ鹿野郎！！」

思わず腹から、いや心から出た怒りが大きな叫び声となる。

「最低！？お前はどこにでもいる普通の人間だ！利用！？違う！お前は、俺に頼っただけじゃねえか！迷惑！？どこの世界に可愛い後輩に、大好きな奴に頼られて迷惑な人間がいるっつーんだよ！」

「……せん……ぱい……？」

めもりが言った一言一言を全て否定する。

思わず余計なことも口走った気もするが、とにかく俺の想いをぶちまけるしかもう方法が思い付かない。

俺の、めもりの記憶を見て、わかったこと、気付いたこと、俺の出した答えを、叩き付けてやるしかない。

それが正しいのかどうかなんてわからないけど、そうすることしか俺にはできない。

「いいかめもり、こいつは、ダークケイトは、お前の中の“闇”だ！“絶望”だ！“弱気”だ！“ネガティブ”な“後ろ向き”な、もう一人のお前だ！」

「……もう一人の……私……？」

「……そいつはいつだって急に現れて、自分の嫌なところを、嫌な思い出を、『トラウマ』を見抜いて、浮き彫りにさせて、いつだって側にいて、自分に語りかけてくる、もう一人のお前だ」

『トラウマー』達を束ねる最強、最悪の王の正体は、なんてことない。誰にだってどこにだって、いつも側にいる、もう一人の自分。

弱気な心だ。

「どんなに否定したって、そいつは他ならないお前自身なんだ」

「私、自身……？」

「いくら倒したってまたすぐに現れる。その度に誰だってそんな自分を倒さなきゃいけないんだ。そんな自分としっかり向き合って倒さないと、いつまでたっても前に進めねえ。何も始まらねえ、何も始められねえだろう」

ケイトがめもりを、俺達をいつだって仲間として引き入れようとしたのも、他ならないもう一人の自分だから。そしてそれは、“頑なもう一人の自分を受け入れなければならない”と誰もが心の奥底のどこかで思っている自分自身の気持ち。

けれど受け入れるだけじゃ駄目なんだ。

受け入れて、向き合って、それで――

「けど……私、どうしたらいいか……」

「だから、俺がいるんだろ！」

そう、一緒にぶん殴って倒すために、俺はここにいるんだ。

「確かに、世の中にはそいつを自分一人で何とかしちまう奴だっている。けど少なくともお前や俺ははそんなに強い人間じゃない、普通の人間だ。一人じゃ弱気な自分さえも追い払えない、弱い普通の人間なんだ。そしてそんな俺達にいつだって立ち向かえる力を、強さを与えてくれるのは、自分以外の人間さ」

誰かの言葉。誰かの手。誰かの顔。誰かの想い。誰かの作った物。

例えそれがどこの誰かも知らない奴であろうとも、いつだって俺達は助けられて、助け合って、支えられて、支え合って生きてるんだ。

「すぐに弱気になっちまう自分も誰かと一緒なら、きっといつだって乗り越えていける」

「一緒……なら……」

めもりの涙はいつの間にか止まっていた。

「無理に痛みを、嫌な思い出を消さなくたっていい。消すことなんてきっとできないんだ。それもお前の一部だ。世界を守りたいって想いも自分の物。ヒーローになりたいって想いも自分の物。誰かに認められたいって想いも自分の物。それを裏切られて、落ち込んでしまうのも自分の想いだ」

俺がそうであるように、お前だってそうなんだ。

「そうやっていくつもの弱気があったって、一人じゃない。お前には俺がいる。俺がいつだってお前の側にいて、一緒にぶん殴ってやる。何度でも何度でも一緒にぶん殴ってやる！」

「先輩……」

抱き寄せためもりを放し、俺は立ち上がる。

「だから今はひとまずさ、目の前にいる弱気なお前を、一緒にぶん殴って倒しちまおうぜ！」

一緒に立ち上がろうぜ。

めもりに手を差し伸べる。

「……！」

そんな俺の様子を見て、めもりは目を大きく開き、そして、

「……」

顔を伏せてしまった。
……あれ？もしかして失敗した？
「……めもり……」
言いたいことは全部言った。
俺にできることはもう、めもりと一緒にぶん殴ることくらいしか残っていない。
これで駄目なら、どうすりゃいいってんだ。
「……先輩」
「！めもり……？」
少しの間を置いて、めもりが顔を上げる。
その顔から、身体からは真っ黒い血が消えており、代わりに――
「……あれ？」
今まで黒かったせいか？妙に顔が赤く見えるような……。
もしかしてどこか具合でも……

「台詞がクサい」

「……え？」
俺の心配をよそに、次にめもりの口から出たのは、久々の毒舌だった。
「……調子に乗り過ぎ」
そう言いつつも俺の手を取り立ち上がるめもり。
やれやれ。ようやく通常営業に戻りやがったか。
心配も吹き飛んじまうね。
「……さっさとこんな奴、ぶん殴って倒しちゃお」
しかしその顔は、以前の、いや以前よりもすっきりとした、晴れやかなものだった。
「おう！」

だな。ここからが本番なんだ。
「……話はまとまったみたいだね」
それまで俺達の会話にじっと耳を傾けていた、ダークケイトが静かにその口を開く。
「じゃあ、始めようか」
その表情は、初めて見る悪の親玉らしい、威厳のある、極めて真剣なものだった。
俺もぼやぼやしてられねえ。

「めもり」
「何、先輩」
「ベルト、貸してくれよ」
「……やだ」
「何で！？お前それなくたって変身してられるだろ！」
「……これないと、『ヒーロー』っぽくないし」
恥ずかし気にそう言って、ベルトを守るように手で隠すめもり。
いや、とらねえから。
「いやしかしだな、俺はそれがないと……」
「……言われなくたってわかってるわよ、先輩が女装趣味に目覚めたってことくらい」
「そんな性的な成長したつもりもねえよ！」
せっかくのシリアスな雰囲気がぶち壊しじゃねえか！
するとめもりはベルトの星を掴み、右に９０度回転させた。

「……ずっと決まらなかった、最後の必殺技がやっと今決まったの」
「最後の必殺技？」

「集まれ星の光、『メモルアルタクト』」

叫び終わると同時に変身ベルトの星が強い光を放ち、天を貫く。

そして――

「これって……」
「うん」

俺の右手には、今めもりが付けているベルトと同じ、変身ベルトが現れた。

「『美少女ヒーロー☆めもり』の最終必殺技、名付けて『ダブル☆めもり』！」

俺の隣の、青いめもりが若干ダサめのネーミングセンスを披露する。

「よっしゃあ！やったらあ！」

俺にはそれが堪らなく可笑しくて。

そして堪らなく、嬉しかった。

「変☆身！！」

ベルトから無数の星が散りばめられそれらは右手を被い、左手を被い、身体を、両足を被い、そして最後に頭を被う。

「煌めくは静寂の星、『美少女ヒーロー☆めもり』！」
「煌めくは情熱の星！『美少女ヒーロー☆めもり』！」

今ここに、青いポニーテールのめもりと赤いツインテールのめもり、
二人の『美少女ヒーロー☆めもり』が出揃った。

「一緒にぶん殴るって約束なんだから武器はなしよ、先輩」
「もちろん！ぶん殴りは、得意だから任せて！」

「……じゃあ、始めようか」
そう言うや否や、凄まじいスピードで突進し、俺とめもりに何発もの拳を炸裂するケイト。
「……ッ！」
「速い……！」
拳が当たる度に、その箇所が、直接心に響くほどの痛みを発する。
「避け……切れない！」
黒くて、重い。嫌な気持ち、嫌な思い出が走馬灯のように駆け巡る。
こいつに勝てないのではないか。そんな気持ちにさせられる。
「どうだい？止むことのない“弱気ラッシュ”は！」
まさにその名の通り、弱気に打ちのめされる。
喰らっても喰らっても、それは止むことなく心を打ちのめしていく。
けど……。

「……先輩……！」
「……わかってる！」
今のめもりと俺に、俺達に、“弱気”は通じない。

「避け切れないなら……受け止める！」
俺は腹にぶちこめられた拳を、めもりは頬にぶちこめられたもう一方の拳を、それぞれ片手で受け止める。
「……なっ」
両方の拳を受け止められ、動きが止まるケイト。

「私達は決めたの。もう二度と、逃げないで――避けないで、あんたと――もう一人の自分と、しっかり向き合って、しっかり受け止める！」
「そんで、ぶん殴って倒す！何度でもだ！」

空いているもう片方の手を握りしめる。

拳に、渾身の力をこめる。

「必殺、ダブル☆めもりある……」「必殺、ダブル☆めてお……」

「パンチ！！！！！」

統一されない必殺技の名前が叫び渡り、二人のめもりの拳がケイトの両頬を打ち抜く。

青いめもりと赤いめもりＶＳ黒いめもりの闘いは、意外と言うべきか、当然と言うべきか、この一撃――いや二撃で、幕を閉じた。

何故かって？
お互いが一緒にいたいと願い、晴れてその願いが通じた直後の、初々しいほどに眩しい二発の拳に、弱気が吹っ飛ばないわけがないだろ？

「……クサすぎ」

……悪かったな。

「また、君の前に現れても、いい？」

二度目の最期にそう問うたケイトに、

「いつでも来なよ。その度にぶん殴ってやるから」

星のように眩しい笑顔でそう答えためもり。

「……ありがとう、二人のめもりちゃん」

消える直前に見たケイトの笑顔は、

弱々しく、だけどそれが本当の、心からのものだったように思えた。

「……もしもし」
「めもりー！俺だー！」
「……何ですか先輩」
「何でせっかく携帯電話ってやつを買ったのに電話してくれねえんだ！」
「……ボリュームの下げ方わかります？声の」
「え！？それ操作できるの！？」
「はい、喉で」
「俺の問題かー！」

人はいつだって簡単に傷付いてしまう。
立ち上がって、歩き始めてもまたすぐに傷付き、その度に立ち上がり、その度に傷付いていく。
どんなにそれを否定したところで、それは当たり前にやってくることなのだ。
周りから傷付けられたり、時に弱気な自分が現れて自分で自分を傷付けてしまう。
どこにいたって、それはいつもやってくる。

「昨日も電話したじゃないですか、通話料が大変なことになりますよ」
「え！？1時間で30円じゃないの！？」
「そんなに美味しい話は決まって詐欺ですね。元気出してください、先輩」
「いや、俺が話聞いてなかっただけって可能性は！？」
「残念ながら……」

「えええええ！？」

けれど、いつだって人はそれに立ち向かい、倒して、乗り越えていける。
誰かが傷付いても、立ち上がった誰かが、助けて、支えてくれる。
立ち上がった誰かが再び傷付いても、他の立ち上がった誰かがまた助けて、支えてくれる。

「そもそも先輩が言い出したことじゃないですか。『世界中の人々に、一人なんかじゃないんだって、わかってもらおう』って」
「……う……」
「『一緒に弱気な自分をぶん殴って倒してやろう』って」
「……うう……」
「『そのためにも、俺達は別々に世界中を回ろう。その方が早いだろ？』って、格好付けて言ってましたよね？」
「……格好付けてたつもりはないんすけど……」

嫌な自分を否定しなくていい。
嫌な思い出を否定しなくていい。
それらを浮き彫りにする、弱気な自分を否定しなくていい。

「けどやっぱり寂しいもんは寂しいだろ？」
「……」
「え！？寂しくないの！？」
「……はあ……」

一緒に、立ち向かって、向き合って、ぶん殴って、倒してくれる人は、力を、強さを与えてくれる人は、いつだってどこかにきっといる。
自分にとっての『ヒーロー』は必ずどこかにいるんだ。

「なあ、めもりー」
「……後ろ、見てください」
「後ろ……って！なんでここにいるんだよ！」
「……駄目ですか」
「いや駄目じゃないけど」
「……寂しくて」
「え！？なんて！？」
「寂しくて！弱気になっちゃったの！だから一緒にいて！」
「……めもり」
「……駄目、ですか？」
「……やれやれ。そんじゃ、また一緒にぶん殴って倒してやりますか！」

それが子供であろうと、大人であろうと。
女であろうと、男であろうと。

「とりあえず変身しとく？」
「……そういう意味で言ったんじゃないんですけど」
「……へ？」
「……もういいです、さっさと一人で変身してください」
「え！？ちょっと待て！どういうことだよ！？」
「うるさい！ねじ切りますよ！」
「どこを！？」

自分にとっての『ヒーロー』はどこかにきっといる。

『美少女ヒーロー☆めもり』はいつだってすぐ側にいて、助けて、

支えてくれるはずだ。

そう。その正体が例え、俺みたいな２４歳の男だったとしても、な。

（おわり）

美少女ヒーロー☆めもり（後書き）

これはあくまでヒーローの物語ですが、同時に、どこにでもありふれている物語でもあると思っています。
読んでくださった方々、ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2484t/

美少女ヒーロー☆めもり

2011年6月3日19時06分発行